

シンクロナイズド・ウォーキング

作・清水弥生

※登場人物

花 マラソン選手。ベッドハウス「リヴァプール」の住人となる

ミナミ ベッドハウス「リヴァプール」経営者。身体障害を持ち、普段車椅子で生活している

イシ ベッドハウスの住人。介護労働者であり、食品加工工場でも働いている

テイ ベッドハウスの住人。中国から移住し、介護労働者として働いている

トイキ ベッドハウスの住人。介護労働者。12歳の子どもの母

エマ ミナミの母

アサリ 食品加工工場で働くイシの同僚

シスター

バタ 公園のテント生活者

部長 労働組合の幹事

二宮 車椅子の男性

梅里 不動産屋、ヤクザ

ウエマツ君 二宮の介助者

ヨシオ トイキの元夫

## ※ルート1 トラック※

車椅子に乗った女性、ミナミが出てくる。左手は麻痺が強いため、常に、車椅子に紐で結びつけられている。首が常に斜めに傾いている。

ミナミ ……そうですね、走っている夢は見ます、完璧な走りの夢。私にとっての完璧な走りは空を飛ぶことに似ています。あらゆる知識、エンジンの知識、天候の知識、危機管理の知識を頭にたたき込む。そして、いざ飛ぶ時には、ただ長く飛び続けられるガンリンだけをたっぷり載せて、発進する。いよいよ飛び立ったら気圧、スピード、機体の向きを敏感に捉え風に乗ってバランスを取っていく。集中力、判断力、後は忍耐力。そうして自分の身体を操縦し、自分だけが、世界で初めて出会ったような景色が眼前に開けてくる至福の喜びを、たった一人操縦席で噛みしめているんです。……マラソン初レース、頑張ってください。

花が浮かび上がる。

花 こんにちは、ミナミさん。素敵なコメントありがとうございます。パイロットも、ランナーも、本当に苦しい時は、圧倒的に一人ですね。自分は鳥ではないのだから、自分の機体を上手く操っていかねばならないことを、忘れずにいようと思います。いつも励まして下さりありがとうございます。あなたがコーチだったら、私は誰よりも早くマラソンを走り切れそうな気がします。いつかあなたの住む街中を、一緒に走りたいですね。

スポットライトがふっと落ちる。

ピーツというレース開始を告げるホイッスル。

ミナミ あなたのレースをテレビで見ました。前半、安定した走りでしたね。でも、途中からどんどんスピードが加速して、それをあなたは自分で止められなかった。折り返し地点を越えた時には、私まで心臓がドキドキしてきました。あなたがゴールして倒れ込んだ時、私は涙を流していました、自分でも、なぜだかわからないのですが、…：あなたが陸連やマスコミに、トラックランナーに戻るべきだと言われていること、わかる気がします。あなたはまだ、マラソンに耐えうる筋持久力のある足を身に付けていない。長距離であれだけの記録を持っているあなたです、自分に合った活躍の場に戻るのが自然と思われても無理はないでしょう、

(ミナミのセリフ中、花、尻餅をついている。)

花、立ち上がる。

花 偏頭痛がします。

ミナミ 私があなたのコーチなら、少し、気分転換して、いい空気を吸って、今後のことをゆったり考えるのがいいのではないかと提案します。私のチームのメンバーでしたら、そう勧めるでしょう。

花 言われていることはわかるんです。でも、私は、幾らまだマラソンの身体になつていないと言われても、途中でガクツとなる恐怖に襲われても、マラソンのチームに入ってもらえなくても、トラックを旋回するより街中を駆け抜けたいのです。

ミナミ あなたを自由に走らせてあげたい。私のチームのメンバーは、思う存分、街の中を駆け回っていますよ。街はずれの操車場、惣菜工場、歩道橋を通って小さな教会、保育園を駆け抜け、都電の線路をまたいで商店街のアーケードをくぐり、公園の隣、私達の家であるベッドハウスに戻ってきます。春は川沿いの桜並木道にコースを変更するのも気持ちいいでしょう。

花 あなたのチームに入れて下さい。あなたの元でトレーニングして、私はもう一度マラソンに向かう自信を得たいんです。

ミナミ それはお勧め出来ません。だって、あなたのいる世界と、私のいる世界は少し違うと思うんです。私があなたの力になれるとは思えません。

ミナミ、出て行く。

花は方向を変え、走り始める。

(花が行き着いたのは東京のとあるひなびた街。物語の舞台となる、ベッドハウス「リヴァプール」の存在する街は、都心から電車やバスで30分もかからないところに位置している)

街の中の雑踏、商店街の呼び声、学校での子供達の声、列車の軋む音などが響いている。花は止まって息をついている。

花 (看板を見付けた模様) ベッドハウス「リヴァプール」……。

ベッドハウス「リヴァプール」のロビーにエマがいる。

花、入ってくる。

エマ いらっしやい。ご宿泊、希望？

花 ……ええ。

エマ 相部屋でしたら一泊1500円、もちろん、女性限定ですから安心ですよ。それが売りですから。個室でしたら2800円になりますけど、長期でということでしたら、少しお勉強させて頂きます。トイレ、シャワー、洗濯機共同、コインロッカーあり、相部屋、個室共にカラーテレビ付きですよ。このロビーだと、えー、無線ランというやつも使えます。……私はやり方わかんないけど。何泊なさいます？

花 えっと、何泊まで出来るんですか。

エマ 何泊までって……。お金が持つなら幾らでも。一番長くて二年泊まってる人もいますしね。ここ二年前オープンしたばかり。どこの部屋もまだ綺麗ですよ。

花 はあ、……。あの、ミナミさんは？

エマ ミナミ？

花 はい。

エマ ミナミの友達？

花 いえ、友達ではないんですが、間接的に紹介を……。

エマ あ、アルバイトの紹介されてきたのね。あの子、今、留守にしてんのよ。区役所から、実績表の不備があるって連絡が来て、出ちゃったのよ。

花 実績表？ 選手のですか。

エマ 選手？ 選手っていうか、お客さんね。利用した時間を計算してまとめた書類のことですよ。

花 時間制なんですわ、やっぱりミナミさん、売れっ子なんだ、コーチとして。

エマ 別に……。特に売れてるわけじゃないですよ。この仕事はどこでも、そこそこの需要はありますから。コーチ……。

花 たくさんの方と個人契約してらっしゃるんですか、ミナミさんは。

エマ そうね、10人くらいかしら。長時間の日常生活支援の人もいれば、家事援助だけの人もいるから、シフト組むの苦労してるんですよ、毎月。

花 へえ、そんなことまで……。幅広いトレーニングですね。やりがいありそう。

エマ やりがいはあると思いますよ。私は娘のしかやったことないので、他の人のことは分からないんですけど……。娘のことに関しては、プロフェッショナルである自信はありますよ。

花 わあ、お母さんがミナミさんを鍛えあげられたんですね。

エマ ……そういう言い方をされると、まあ、そうなんですかね。あなた、初めて？

花 いえ、他のチームにいたんですが、今回、ミナミさんと是非、一緒にさせてもらえなにかと思ひまして。

エマ あ、そう？ あの子も喜ぶわ。ヘルパー足りないし。

花 ヘルパー？ ヘルプする人？

エマ ええ、ええ、シフトもなかなか組めなくて。

花 シフト制なんですか。チームの方がやってらっしゃるんですか？

エマ チーム？ チーム三人娘のことね。住み込みで、仕事に行ってる。

花 ミナミさんもここから、通ってらっしゃるんですか、仕事に。

エマ あの子が、人の世話できるわけじゃないじゃない。

花 え？

エマ 車椅子なのよ。

花 ……。

エマ あの子も利用者なんですよ。経営者兼利用者。

花 走れないじゃないですか。

エマ 走るところか、歩けもしないわよ。

花 歩けない……。

エマ ……いや、昔、私がリハビリ特訓して、一歩か二歩は自分で歩けたこともあるんですけどね。でも、昨日出来たことが、今日出来なくなったり。そんなことに、一喜一憂してた程度。一応、あの子、それで一人で着替えられるようになったんですよ、三時間ほどかけたら。

花 三時間……。

エマ 食事は自分でちぎらずに済む流動食をストローで吸って済ませて、トイレ終らせるのに5時間かける。なるべく人の手借りないでやらせようってそういうトレーニング、してたんですよ。だって、私がいつまでも側にいられるわけじゃないですから、何とか一人立ち出来るようになって、思ってたんですけどねえ。……まあ、あの子にまだ、根に持たれてます。

花 ……。

エマ だから、今、そういう自分の「ショウガイ」も資本に入れて、上手くビジネスしてるわけよ。サービス提供分、区役所に請求するんです。

花 ショウガイ……。

エマ あの子、自分がそんななのに、お客さん優先するから、自分の介助者いつも足りなくなっちゃうの。それで私の出番が来ちゃうのよ。そういうわけで、今、慢性的に人手不足なのでやって頂けると助かるわ。短時間でもいいのよ。一日三時間でもオツケー。

花 ええ……。

エマ ホント？ あの子も喜ぶわ。どうぞ、よろしくお願い致します。

花 私、今、ええって言いました？

エマ 言った、言った。アルバイトすると、宿泊代安くなりますからね、そういう特典付き。

ミナミ、入ってくる。

エマ あ、お帰り、アルバイトさん、一人決まったよ。

ミナミ ……。

エマ 宿泊も希望されるんですって。(花に) 相部屋で、よかったかしら。あ、娘のミナミです。

花 ……。

ミナミ 面接は、私がするわ。

エマ やりたいてって人には、やってもらったらいじゃない。

ミナミ お母さん、留守番ありがとう。

エマ 記念パークのごたごたで、なかなか新しい人、入ってくれないんでしょう。もったいぶって面接なんてしなくても……。

ミナミ お母さん。

エマ はいはい。

エマ、ロビーを出て行く。

ミナミと花、しばらく対面している。

ミナミ ご案内致します。1階の、6人部屋へ。

ミナミ、部屋を出て行く。

(ベッドルームにて)

舞台はベッドハウス「リヴァプール」のベッドルームに移る。

花は空いているベッドに潜り込む。

ここは女性達の寝床である1階の6人部屋である。トイキの娘が寝入ったのを見計らって、テイ、トイキ、イシが声をひそめて話している。時々ずるずるという音は、テイがカップラーメンを啜る音である。

テイ もう、大丈夫。寝た寝た。

イシ 気持ちよさそうに眠ってるよ。ハムちゃんの方もね。

トイキ それでも、ここ来た時、震えてたんだって、あの子が言うには。

イシ ハムスターって本当は冬眠するんじゃないの。

テイ 知らない。

イシ 冬眠するんですよ。

トイキ だったら、あんまり暖かくしてあげたらかえってよくないんじゃないの？ 調子

狂って、死にやしないかしら。

イシ そうすると、一回暖めると、いつまでも暖め続けなきゃいけないのかな、死ぬまで、毎年。

トイキ だから気まぐれにやんない方がいいわよね。野生に戻れなくなっちゃうし……。  
テイ でも、それ、戻す気ないんでしょ。死ぬまで、面倒見てあげたらいいんじゃない。  
イシ 冬眠する権利を奪うんですか。

トイキ 死ぬまで面倒見るってわけにはいかないのよね、人間の場合。

イシ 学校は？

トイキ ずつと行ってない。

イシ 冬眠中か……。

テイ 冬眠ってどうするの。普通に寝るの？

イシ 心拍数と体温をぎりぎりまで下げるんですって。

テイ どのくらい。(想像して寒くなる)

イシ 思いつきり、気温と同じくらいに下げて、身体機能を低下させて、要は、「モ

ノ」みたいになるんだと思いますよ。

テイ もったいないよね、せっかく生きてるのに。

イシ その分、長持ちするんですよ。ほら、シンクロナイズドスイミングの選手なんか、水の中に潜ると、一気に心拍数が減るっていうでしょう。そうすることで、長く潜っていられるらしいですよ。あのスポーツって、ぱあって水面上に上がってくるでしょ。

そんなとき、心拍数が40から200に上がったたりするらしいですよ。

トイキ そんなに急に上がって大丈夫なの。

イシ いや、目の前は真っ暗で、失神寸前。

トイキ 全然見えないよね。

イシ 水の中から飛び出すのも、決死の覚悟なんですって。

トイキ ……じゃあ、二人揃って合わせてるのかしら、心拍数も体温も。

テイ なに。

トイキ シンクロナイズドスイミングの選手。

イシ 合わせてるんじゃない、選手なんだから。

花、寝返りを打つ。

三人、耳を澄ませる。

テイ ……今日来たお嬢、運動選手っぽくない？

トイキ いい身体してるよね。

テイ ナニモノ。

トイキ さあ。

イシ あんまり、話したくないみたいでしたよ。

テイ ワケアリ。

イシ いいんじゃないですか、ミナミさんの介助者、足りな過ぎるんですもん。

トイキ 本気なんだ。

イシ 明日、あのお嬢に、介助のための研修してくれって言われてるんですよ。教えるって言っても、何から言えばいいのかな。

テイ タコの問題。

イシ ……てこの原理ですか？

トイキ ……テイさんの日本語の、変遷過程がみたいよね。

テイ (カッププラーメンの器を置き) ああ、食べ終わっちゃった、つままない。

トイキ これから春にかけて大変よね、花粉症。

テイ ミナミさんの鼻にティッシュ、詰めちゃったままにしておきたいですよ。

トイキ この時期、あの子のアトピーも、ひどくなるのよね(ため息)。

テイ どうして。

トイキ 冬眠から覚めるのが、恐いんじゃない……？

不意に、目覚まし時計にも聞こえるような電話のベルの音。

ベッドハウス「リヴアップール」のロビー。

奥には窓があり、外の景色が見えるようになっていた。

ロビーの真ん中には小さいソファ、椅子、テーブル、電話機、脇に雑然とした本棚、雑誌スタンドには新聞、その他のリーフレット、壁にはカレンダーや、列車の時刻表、地図、英語の案内、電話の掛け方の案内等、張り紙がたくさん貼られている。

奥の窓の近くに車椅子と、それに乗った女性ミナミがいる。

花が受話器を取る。

花 はい、ベッドハウス『リヴアップール』です。……え？ はい？ ……どなた様ですか？

ミナミ 誰？

花 ……。

ミナミ 言って。

花 (受話器を外して) 「社会のお荷物なんだよ」。

ミナミ ……。

花 「安楽死させてやろうか」。

花、受話器を置く。

ミナミ 気にしないで。

花 ……慣れてらっしゃるんですか。

ミナミ ほとんどの場合、私が替る前に、介助者が切っちゃうんですよ。私はあんまり、直接受けてないの、ダメージ。でも、最近増えたわね。

花 ……多いんですか？ こういう電話。

ミナミ まあね。直接いちゃもんつけてくるヤクザもいるし。

花 ヤクザ？

ミナミ この辺のドヤ、もう、ほとんどヤクザの不動産が握ってるから。

立ち退かないって言ってるの、隣の公園に住んでる人達と、私達だけ。

花 ……もう、場所、正式に決まってるんですか。

ミナミ 街はずれの、貨物列車の操車場、あるでしょう。

花 はい。

ミナミ あそこから、都電の駅まで。一帯。

花 ……ランニングコースが、なくなっちゃう。

ミナミ ……ねえ、あなたにとつて走るって、どういうこと？

花 ……。

ミナミ ？

花 生涯学習です。

ミナミ ショウガイ学習。

花 ええ。

ミナミ ふうん……。続き、読んでもらえます。

花 はい。

ロビーに置いてある意見・感想箱に入った投書を、花がミナミに読んで聞かせていた様子である。

花 「暖かいおもてなし、ありがとうございました。また来たいです。」

ミナミ はい。

花 「値段の割に清潔で、女性のみということもあり、くつろげました。」

ミナミ はい。

花 「洗面台が汚れていた。廊下も汚かった。」

ミナミ 車椅子のせいかな。

花 「洗濯機いい加減新しいのにしましょうよ。」

ミナミ イシちゃん、しつこい。

花 「ペットを飼わせてほしい。」

ミナミ あの子ね。解決済み。

花 「英会話教室開きたい。先生やります。」

ミナミ テイさんね。

花 「朝は寝かせてください。」

ミナミ トイキさん。

花 「憲法第25条生存権についてどう思うか。イニシャルBより」

ミナミ 部長か。

花 もしもあなたがドラえもんになれば、何がしたいですか。

ミナミ ……。

花 私です。

ミナミ ……あなただったら、どうするんですか。

花 私ですか。私だったら、(花、考えて)「何でも音声機」みたいなを出して、ミナミ

さんにプレゼントしますね。

ミナミ どんな道具？

花 考えてることが、すぐみんなに全部、音声に変わって伝わるんです。

ミナミ みんなに全部？

花 例えば、今、トイレに行きたいな、と思ったら、その「トイレに行きたい」というミ

ナミさんの思いが館内放送のように皆に届くんです。そうすると、誰かがすぐに、ト

イレだ！って、駆けつけてくれるんです。

ミナミ 絶対に嫌だ。

花 そうかな、頼む手間が省けていいアイデアだと思うんですが。

ミナミ 例えば、あの介助者が嫌だ、と内心思ってたとしたら、それが館内放送で流れる

わけですよ。お前は嫌いだ、だがトイレは手伝ってくれ、と。

花 ……それはお互い、きついですね。

ミナミ 私はドラえもんなんか嫌ですね。

花 どうして。

ミナミ 私は give and take がいいんです。ドラえもんはのび太に与えるばかり。のび太

はドラえもんに頼るばかり。

花 そうですかね。

ミナミ どうして。

花 のび太も、何かあげてるんじゃないですか、ドラえもんに。

ミナミ 何を？

花 ……仕事？

ミナミ ……確かに、それであるアニメは成り立ってますよね。

花 でしょう。

ミナミ ……それで、あなたは、私の、ドラえもんになるつもり？

花 ……。

溶暗。

※ルート2 ルーティーン※

(これから行われるイシ、トイキ、テイ、それぞれの介助はシンクロナイズド  
スイミングの音楽に乗った演技のように華麗に行われる。尚、介助の交代は早  
回しのテープのように速やかに行われる。花はその様子を見学している。)

イシが電動歯ブラシを持って真剣な顔でミナミに対峙している。

ミナミ ……あ、イシちゃん、今日口内炎できてるから、今度にしようか。

イシ 何、怖じ気づいてるんですか！ 今日、これ試すと決めたじゃないですか。

ミナミ 今日、そういう新しい機器使うには、コンディションが悪くて……、(イシの情熱  
に押されて)……右の歯茎の下は、避けてね。

イシ 了解！

花 新しい方法は積極的に取り入れるべきである。

イシ、電動歯ブラシでミナミの歯を磨き始める。

ミナミ あいたたたたた、ストップ。(側の洗面器に唾を吐く)

イシ 触っちゃいました？ 口内炎。

ミナミ もう、いいよ。私、歯磨きに向いてないのよ。

イシ 諦めないで、ミナミさん、歯医者さんも言ってたじゃないですか。ただでさえ歯が  
弱いんだから、しっかり磨かなくちゃって。

ミナミ うん、追々ね……。

イシ その、「追々」でここまで虫歯が悪化したんでしょう、ミナミさん！

ミナミ あ、もう時間だよ。工場の仕事遅れちゃうでしょ。

イシ くっ、無念……。

花 怠惰の蓄積は災いを招く。

イシ、出てきたテイにバトンタッチ。

ミナミ テイさん、鼻嚙んでもらえます。

テイ はい、来た。

テイ、ミナミの鼻にティッシュを当てる。

テイ ミナミさん、今日、4時から、あれなんですよ、いいですか。  
ミナミ うん、いいよ。

テイ、素早くテレビを付ける。時代劇が始まった模様。  
テレビを見ながら、ミナミの鼻を拭いたティッシュをゴミ箱に放り投げる。

ミナミ テイさん。

テイ はいはい。(ミナミの鼻をかむ)

テイ、ゴミ箱にティッシュを放り投げる。  
しばらくしてミナミ、また鼻水が出てくる様子。

ミナミ テ。

テイ、素早くティッシュを取り、ミナミの鼻をかみ、ゴミ箱にティッシュを放り投げる。

ミナミ テ。

テイ、素早くティッシュを取り、ミナミの鼻をかみ、ゴミ箱にティッシュを放り投げる。

ミナミ イ。

テイ、素早くティッシュを取り、ミナミの鼻をかみ、ゴミ箱にティッシュを放り投げる。

ミナミ 違う違う、テイさん、交代の時間。

テイ あ、そうか。

花 いつもと同じメニューでも、実施状況を確認する必要がある。

テイ、食事を持って現れたトイキにバトンタッチ。  
トイキがぼんやりした様子で、ミナミと食事している。自分でも食べながら、  
ミナミの口に食事を運んでいる。

ミナミ ……トイキさん、それ、私の。(いつのまにかトイキがミナミの箸でミナミの食事

を食べているのを見て。)

トイキ あ、やだ、ごめんなさい。お茶飲む？

トイキ、お茶をストローでミナミに飲ませる。

ミナミ 熱い！！！！

ミナミ、むせて口の中のお茶をトイキの顔にシャワーする。

花 ミナミさんは猫舌である。

ミナミ ……ごめん。

トイキ (タオルで顔を拭きながらため息)

ミナミ 大丈夫？ 何かあったの？ ハルのこと？

トイキ あの子…、家出してきた訳も何にも話さないんだけど…。

ミナミ うん。

トイキ アトピーで掻いた跡のと、別の傷があるみたいなのよ、……手首に。

ミナミ ……それ、何？

トイキ わかんないのよ。

ミナミ 今日、もう、側にいてあげたら？

トイキ いい？ ごめんね。

ミナミ うん。

花 問題を解決しておかないと、目的に集中できない。

ミナミ、出てきた花に、バトンタッチを促す。

花、トイキとタッチして交代。

花がせつせとクイックルワイパーのようなもので床掃除をしている。

ミナミ 花さん。

花 はい。

ミナミ ……(上着のシミを顎で指して) ちょっと、ここの歯磨き粉、取ってもらえる。

花 はい。

ミナミ あ、いいか、着替えちゃおうか。

花 (ミナミの上着を脱がせながら) 洗濯、まだいいですよ？ 一枚だから。

ミナミ え、たまってたよね。

花 今朝洗いましたもん。

ミナミ え、そうなの。

花 ええ、シートも洗いました。

ミナミ シーツも？

花 みんなの分、洗って干してあります。

ミナミ みんなの分？

花 あら、まさかったですか。

ミナミ いや、花さん、あなた、うちの家政婦ですか。

花 違います。

ミナミ 私の手や、足の代わりになって頂く仕事ですよ。そしたら、何かやる前に、私に必ず聞いてほしいんです。

花 ……。

ミナミ 難しいですか。

花 やってみます。

花、ミナミの近距離で、ミナミの行動をじっと見つめて待ち構えている。

ミナミ 何か、プレッシャーを感じるんですが……、もう少し、気楽にスタンバイできません？

花 気楽に？

ミナミ その、オーラが出てるんですよ、何か手助けしたい、という。普通に待っていてくれればいいんです。

花 普通に、……ハイ。

ミナミ、しばらく窓の外を見て考えていたが口を開く。

ミナミ あの。

花 はい！

ミナミ 頭搔いてもらえます。

花 ……はい。(ミナミの頭を掻きながら)どの辺ですか。

ミナミ もうちょっと上。……そこそこ。もっと強く。もういいや、ありがと。

花 自分から指摘しない限り、問題の所在を理解してもらうことは難しい。

ミナミ (花、ミナミから少し離れる)今から言うことを、メモしてもらえます。……明後

日のイベントのスピーチなんですけど。

花 はい。

花、紙とボールペンを用意する。

ミナミ 私達は東京オリンピック記念パーク建設に反対します。……私達は、ここで、時間を掛けて生活の基盤を築いて来ました。ここでの生活を守るため、私達はこれを何とかしてでも阻止しなければなりません。長野の惨状を見て下さい。巨大なオリンピック施設は市民の日常利用するものとはならず、自治体のお荷物となって老朽化。

花 あ、すみません、「ろうきゅうか」の「キユウ」ってどんな字でしたっけ。

ミナミ 「朽ちる」って字です。

花 くちる？

ミナミ スピーチだからひらがなでいいです。

花 はい。

ミナミ 「オリンピックが地域復興につながる」？ ばかばかしい。もはや自分達の街の

未来を、政府や利権屋に任せていては駄目です。

花 ……。

ミナミ どうした？ 早い？

花 いえ、文章の……。

ミナミ はい。

花 間にマルを入れましょうか。

ミナミ あのねえ、マルくらい自主的に入れて下さい。

花 さっき何かやる時必ず聞いてからにしてください。

ミナミ 言いました。言いましたけれども……。

花 あの、でも、オリンピックに罪はないですよね。

ミナミ ……。

花 なんて……。思ったりして……。

ミナミ あなたのトレーニング場所、もうじき立ち入り禁止になっちゃうの。

花 えっ。どうしてですか。

ミナミ 行政代執行で、公園のテント全部撤去。公園に住んでる人達、追い出そうとしてるの、記念パーク建設のためって名目で。明後日、私達がやるのは、その抗議のためのイベント。

花 そうだったんですか……。

ミナミ 路頭に迷っちゃうでしょ、公園の人達。

花 ……。

ガタツと音がする。

花、窓の外を見る。

花 公園の、ダンボールが空飛んでいます！

サッカーボールが飛んでくる。花がキャッチ。  
車椅子の男性、二宮と、その介助者ウエマツが入ってくる。

ミナミ お帰りなさい。

二宮 たいま。

ウエマツ すごい風でした。

二宮 いやあ、車椅子ごと吹っ飛ばされそうになっちゃった。

ウエマツ こんな風の強い日だったら、風力電動自家発電車椅子、なんて出来そうじゃない？ エコの時代にびったり。

花 出来ますね！

二宮 それ、効率悪くない？

ミナミ 何、サッカー帰りですか？

二宮 いえ、今日は筋ジス協会の集まりに行ってきたんです。

花 協会って？

ミナミ 筋ジストロフィーの。活発ですよ、いいな。

二宮 結構遊ぶの好きな人多いんです。知り合った人と一緒にイベント企画したりしてる。ウエマツ 彼、電動車椅子サッカーで、いい筋いってるんですよ。

二宮 俺ら、ワールドカップ、ブラジルまで見に行っただんですよ。

花 車椅子で？ すごいですね。

二宮 何とかなるもんだよね。

ウエマツ 面白かったよね。行き当たりばったりで。

ミナミ ……アパート、探してるんだよね？ 見付かりそう？

二宮 不動産屋の入り口で、入ろうとしただけで、うちはそういう物件は扱ってませんって。もう慣れましたけど。今回帰るまでにはたぶん決めるの無理かも。

ミナミ アパート決めたら、住民票移して、改築費用やサービスの申請、区役所と交渉するよね。その辺は大丈夫？

二宮 まだ、そこまで頭回ってなくて。

ミナミ 最初の態度が肝心ですよ。なめられちゃだめ。

二宮 ……何か、アドバイスもらえます？ 僕に。

ミナミ ……きかん気と居直り。

二宮 キカンキとイナオリ。

ミナミ 誰が何と言おうと突き進むぞっていう、きかん気と、仕方がないから世話になりますっていう、居直り。

二宮 きかん気と居直り。

ミナミ 障害者だからって何が悪いの？

二宮 ……はい。

ミナミ 人は大抵「わがまま」って捉えるよね、私達が、案内される方向と逆に行きたいって思う気持を。

二宮 ……。

ミナミ でも、今、私が地域で暮らしてられるのは、その「わがまま」を押し通して、先輩達が敷いてくれたレールのおかげなんです。……私の言いたいこと、何となくわかります？

二宮 ……ええ。

ミナミ 私の、初めて一人暮らしを決意した時のきっかけ。

二宮 何ですか。

ミナミ 髪伸ばし立ての頃、母親に「洗うのが大変」って言われたのが頭来て、次の日ばつさり切っちゃった。その時、鏡見ながら、決意したの。ああ、髪の毛伸ばすために、一人暮らししなきゃって。

二宮 髪長い方が、似合いますよ。

ミナミ そう？

二宮 絶対。

ミナミ ……ありがとう。

ウエマツ ……ねえ、ここ、他に男の人って、泊まってます？

ミナミ 今は、長期で宿泊してる私の介助アルバイトの女性が4名、……それだけですよ。二宮 ウエマツ君ね、見たっていうんですよ。

ウエマツ いや、たぶん男だったと思うんですけどね、でも、自信ないですよね……、

昨日の夜中、トイレ行った時に、ふらっと歩いていく後姿見えたの。

ミナミ それ、どんな感じの人。

ウエマツ んー、小柄で痩せてて、髪の毛は短くて、首や腕に、ガーゼか、包帯巻いてたような……。

ミナミ あの人かも。

花 どの人。

ミナミ 昔、ここ改築する前、まだ父がドヤ経営してた頃ね、202で不幸な事件が……。

ウエマツ ……マジ、やめてくださいよ、俺、駄目なんですよ、そういうの。

ミナミ その人も確か学生運動してて留年して……。

ウエマツ かぶってるかぶってる。俺とかぶってる。

ミナミ この辺で活動しながら働いてた人なんですけど、過労でノイローゼになったみたいで。死んだ後、妹さんが裁判起こして会社訴えたんです、会社の上司や同僚に何回も話聞きに行つて。でも結局、労災認定降りなくてね。……サッカーの話が大好きだったんですよ。

二宮 ……お知り合いだったんですか？

ウエマツ 俺に親近感持って、サッカーの話しに出てきたんですか。

ミナミ ウソ。

ウエマツ ……。

ミナミ ホテルにこういう話は御法度ですからね。わざわざお客にするわけないでしょ。  
ウエマツ ああ……。でも、そうか、いや……。

二宮 そろそろ部屋戻ろうか。

ウエマツ うん。

二宮 また、相談に来ていいですか。自立のこととか。

ミナミ ええ、大抵ロビーにいますから。

二宮、ウエマツ、ミナミと花に挨拶して出て行く。

花 202の話って、イシさんのことですか？

ミナミ どうして？

花 いや、……イシさん、となりのベッドだから聞こえたんです。

ミナミ 何が。

花 寝言が。「お兄ちゃん」って言ってるの……。

ミナミ ……そのせんべいもらえますか。

花 はい。(ミナミの口にせんべいを運びながら)

ミナミ 花さんも、どうぞ。

花 ……いただきます。(花、せんべいをかじる。)

二人、黙ってせんべいをかじっている。

花 ……ミナミさん、筋ジスって、どうなるんですか。

ミナミ うーん。どうなるかと言われても……。

花 よく知らないんですが、進行していくんですよね……？

ミナミ その、タイプにもよるし、人にもよると思う……。昔は20前後で危ないって言われてたけど、私の友達は、23で気管切開して人工呼吸器にして、30過ぎて生きてるし。

花 人工呼吸器……。

ミナミ 起きるたびにだんだん動けなくなっていくのがわかるとは言ってたけど。

花 ……。

ミナミ 進行していくものとの、闘いだからね。

花 ……あの人、幾つでしょう。

ミナミ 二十歳過ぎくらいかな。

花 ……。

ミナミ ……：後ろの鞆から、ファイルに入っている原稿、取ってもらえますか？

花 はい。

花、ミナミの鞆からファイルを出す。

ミナミ 中の原稿を出して、そのの、譜面台に立ててもらえますか。

花 はい。

ミナミ イシちゃんの、お兄さんの遺稿なんです。今度、本にしようって、まとめる。

花 ミナミさんが……？

ミナミ ええ、私にやらせてって、お願いしたの。

花 ……。

ミナミ ファイアンセだったんです。

ミナミ、原稿を読み始める。

(イシの総菜工場)

暗闇の中、イシの姿がぼんやり浮かび上がる。

イシ こうしている間に、私は自分が、宇宙にいるのだと気付くことがある。

ベルトコンベアーの動く音が聞こえて来る。

イシが宇宙遊泳のごとくゆっくり左右に動いている。

白いキャップで頭を覆い、口にはマスクをし、割烹着を着ている。

イシ ここ、日の出リカでリズムに乗りながら働いている時だけ、私の魂は私の肉体から

離れ、宇宙を越えて今は亡き兄の魂と交信することができるのだ。

実際にはイシがアルバイト先の、コンビニ総菜を作る工場で働いている様子。隣で働いている同僚アサリの被っている緑のキャップの後頭部が膨れあがっていることからイシの妄想は繰り広げられている。誰かと通信をしている様子。

イシ こちら日の出リカ星、こちら日の出リカ星、応答せよ、応答せよ、異常なくベルト

コンベアーは回っている。今日も原材料不明、原産国不明のコンビニ弁当を作りだしている。コンビニ弁当は宇宙食だ、私は断言する。今日の私は『イカゲソ揚げ』レー

ンにいる。兄さん、どうぞ。

ミナミ 疲れ切った仕事帰り。もうからだが動かない。倒れるようにして、路上に転がった。ホームレスと呼ばれるみんなと並んで、夜空を見上げた。息が続かない。寝ているのか、死んでいるのか。ダイ・イン。そう、これはダイ・インだ。誰に向かって？何を訴えて？俺は死んでいるぞ！！

イシ トレーの蓋締め係りがスムーズに蓋をできるよう、盛られたイカの足を綺麗に整えるのが今日の私の担当である。

アサリ ちよつと、イシちゃん、もごもご言っていないで早くしてよ。

イシ ……最近ではコストを削減するために宇宙人まで雇う企業が増えたのか。ブラジル人の同僚に時給を聞いてみると300円、尋常ではない。こんなことが許されるのか、どうぞ。

ミナミ 労働関係の法令は、どの国から来た労働者にも適用される。でも、実際は、多くの外国人労働者が最低賃金を下回るわずかな額で長時間労働に従事している。

アサリ イシちゃん、みょーんってなってるよ、みょーんって。

イシ イカの足はなかなか柔軟で、トレー内に押し入れたとしてもすぐ、『みょーん』と跳ね返し、華麗な技を披露してくれる。まるで、女性達が茶色のタイツを履いて、シンクロナイズドスイミングをしているようだ。何か、そう簡単には思い通りにいくものか、という居直りのようなものを感じさせる。

アサリ ちよつと、イシちゃん、手、抜かないでよ。(何か横でつまみ食いしている様子)イシ イカの足は強く押し入れてもじわつと戻ってくる。手抜きしてもピンっと元氣よくその足を見せびらかしながら戻るので忌々しい限りだ。

ミナミ シンクロナイズドスイミングの選手は、止まっている時が実は一番難しい。見えている足は綺麗にすくつと静止していても、水面下では手を激しく動かして、必死に体勢を保ってる。ああ、強くなりたいものだ。

アサリ、こつくりこつくりと手を動かしながら眠っている。

心配してイシが見守っていると、(予想通り)アサリが倒れる。

イシ アサリさん！(アサリを抱きかかえる)

ミナミ 例え今の社会に批判的であろうとも、自らも「今」を構成するファクターであることを忘れてはならない。路上に寝転がった者たちの視線を受け止めよ。自らその眼差しを内在化させよ。

アサリ もう、帰りたい……。

イシ ……イカの足だ。この街の人達はベルトコンベアーに乗せられて、蓋をされていくイカの足。何かしらが上手くいかずにここに辿り着いたこの街の人達は、油まみれの濁った水の中で、かろうじて足だけ出して沈むまいとあがいている。……帰りたい。

でも、どこに帰りたいのかわからない。

ミナミ ダイ・イン。目覚めているなら立ち上がろう。路上に横たわることなく、無言の死者の抗議を我がものとせよ。

イシ ねえ、お兄ちゃん、私、今、どこにいるの。

ミナミ 貧民街、流刑地、ホームレス養成所、東京の吸い殻入れ。

イシ、自分の足下を見る。

イシ どんなに深く沈んだ場所でも、孤独な宇宙船の中にいるんだと思えば我慢できる。

ミナミ どんなに深く沈んだ場所でも、孤独な宇宙船の中にいるんだと思えば我慢できる。

アサリが復活してくる。

アサリ あ、やばい、止めちゃったね、コンベアー。ごめん。

再びコンベアーが回り出す。

イシ いつのまにか地球では、多くのものが、化石と化してしまっている、あんな痩せた土壌ではこの先何も育ちそうにない、どうぞ。

応答がない。ミナミ、眠っている。

イシ もう、聞こえませんか。もう、聞こえませんか……。

溶暗。

### ※ルート3 給水ポイント※

ロビーは炊き出しの準備に開放されている。

部長が全体を見て指示を出している様子。バタ、イシが野菜を切っている。

テイ、シスター、ウエマツが、お鍋やお玉を持って行き来している賑やかな風景。ミナミは隅の邪魔にならないところで、パソコンに向かって仕事している様子。エマは器とお玉を持ってミナミに味見をさせているようである。

エマ (器の中の具をフォークで突き刺してミナミの口に入れる) どう? けんちん汁に

ヨーグルト入れてみたんだけど。

部長 まろやか。

ミナミ うん、大根、味しみてる。

イシ 冷蔵庫のヨーグルト、私のじゃないの……（エマ、イシに食べさせる）ん、イケてる（イシ、バタに回す）部長、まだ、たくさん並んでるんでしょ。あんまり凝らずに早く持っていきましょうよ。

バタ （バタ、味見）ごぼう固え。

エマ あ、まだ早かった。

部長 恐縮です、お母さんにまで手伝って頂いて……。

エマ 今日はミナミの介助者としてやってるだけよ。

ミナミ お母さんは別に反対運動に賛同してる訳じゃないの。

部長 ええ、でも本当に助かります。次の鍋作ったら、後はここ片づけて、公園のメイン会場の炊事場だけでやることにしますんで。ミナミさん、ありがとうございます。

ミナミ いえいえ。

花が空になった鍋を抱えてロビーに入ってくる。

花 （鍋を見せ）完食です！ 街のどこに、こんなに人がいたんだってくらい、いっぱい並んでる。

部長 今日は、記念パーク建設に反対する団体、合同でやってる炊き出しだから、特に多いんだよね。

花 カウント300人くらいだって。

部長 俺やイシの入ってる労働組合と、教会のグループ、フリーター同盟、ベジタリアンの会、墨田のホームレス支援団体、反貧困ネットワークの団体、後、大阪の労働組合からも応援に来てくれてるんだ。（エマ、このセリフの間、花に味見をさせる）

花 美味しい。

部長 組合は越冬闘争の期間、隣の公園でテント張って、毎食炊き出ししてるんだよ。

エマ 隣の公園なくなったら、越冬、どこでするのかしら。

バタ どこだっていいよ。

イシ まだ、なくなるって決まったわけじゃないじゃん。それを阻止するための、今日のイベントでしょ。

バタ あ、葱足りなくなりそうだよ。

イシ 最後の方の人、葱ナシになっちゃうね。

部長 時間的にもオカワリ、お断りするしかないな。

バタ （葱を切りながら）夏なんてね、葱の中に蚩よく、入れなかった？

イシ 蚩？ 何で？

バタ 下田にいた時、夜、兄さんと田んぼに繰り出すんだ。蛍掴まえて、近くの畑の葱を折って、その中に蛍を入れて、手で封するの、そうすると葱の先つぼがポツて光つてね、綺麗だね。

イシ ……兄さんいたの？ バタさんにも。

バタ 戦争のせいで家族バラバラ。

イシ 戦争か。想像もつかないな。昔のことは良く覚えてんのね。

バタ 昨日食べたもんの方が思い出せない。

エマ ああ、そろそろねえ。お宅。

バタ お宅もね。

エマ ……何でお宅だけここにいるの。

イシ バタさん、今、身体ぼろぼろだから、ステージの建て込みや、重いもの持つ外での作業は外してるんです。

バタ 大丈夫だって言ってるのによ。

エマ お宅も物好きね。歳なんだから、テントたたんで、施設に入れてもらったらいいのに。

バタ 俺は公園が気楽でいいの。古い仲間もいるし。

部長 自立支援センター登録に行つて、施設に入れたのに、3日が出てきちゃったんですよ。

エマ まあ、もったいない、ただで3食食べられるのに。

バタ 入ってる間に、テント取られんの、やだからね。

部長 施設いられるの最長で4ヶ月なんですよ。その間に仕事見付からないと、出た時、今よりもっと路頭に迷っちゃうつてこともありますから、難しいんです。

トイキ、慌ててロビーに入ってくる。

トイキ ……ねえ、ハル知らない？ 起きたら、いなくなっちゃって……。

イシ えっ。いないの？ ハルちゃん。

花 探しに行つてきましようか。

トイキ うん……。うん……。

イシ ハルの行きそうなところって、どこ。

トイキ ええと、でもこの辺全然知らないはずだから……。

バタ ハルちゃんなら俺のテント。

トイキ え？

イシ バタさんのテントに？ 公園の？

花 遊びに行つてるんですか。

トイキ 今、じゃあ、一人でバタさんのテントにいるわけ？

バタ いや、テント番のロクさんに見守り頼んでる。

トイキ 危ないじゃないの。女の子なのよ。

イシ まあ、大丈夫じゃない？ 周り、気の良い人達だからさ。

トイキ 気の良かったって、お酒飲んだらどうなるか……。

ミナミ 心配だったらついてあげなよ。

部長 ほら、持ってってあげたら。

エマ ほい。(装ったお碗を二つ手渡す)

トイキ ありがとう。

トイキ、ロビーから出て行く。

エマ トイキさんの娘って、別れた旦那と住んでるでしょ。

ミナミ ええ。今、遊びに来てるのよ。

エマ 公園で三角座りしてた、おとなしそうな小さい子よね。離れて暮らしてて、トイキさん平気なの？

ミナミ 家庭の事情があるのよ。

エマ ふうん、……子供なんて、片時も目を離しちゃいけないものだと思ってた。

ミナミ ……。

テイが入ってくる。

テイ 部長、並んでる人は後50人ぐらいです。

部長 参ったなあ、まだそんなにいるんだ。

テイ ええ。……私、表見張ってますね。怪しい奴らがいるので。

部長 何？ 怪しい奴ら？

テイ ええ、こつちじろじろ見てるの。いざという時にはチョップ飛ばしてやる。

エマ 何、気持悪いわね。

テイ、エマから鍋を受け取り、外に出る。エマも外の様子を見に出て行く。

部長 私服の警察だろう。……みんな、今のうちに食べちゃいな。なくなっちゃうよ。

イシ 私、いい。

部長 イシ、顔色悪いよ。

ミナミ イシちゃん、控えてるのよ、走るから、なるべく身体軽くしたいって。

花 えっ。イシさん、走るって？

部長 実はね、今度の東京マラソン、俺等、日雇いの労働組合員でエントリーして、参加

が決まっちゃってるの。

花 ！？

イシ 東京オリンピックピックに向けて特別にできた新ルール、知ってるでしょ？ 区民対象の

特別抽選枠ができて、そこで二枠当たったの。

花 マラソン、走るんですか……？

部長 俺たちの狙いは別にあるんだ。2016年リオ・オリンピックのエチオピア代表リ

レサ選手、覚えてる？

花 ええ、マラソンの銀メダリストですね。自分の国への抗議のポーズ取ってゴールした  
っていう。

部長 そんな彼の姿を見て、思いついたんだ。東京オリンピック開催に抗議する旗を持つ  
て、東京マラソンを走ったらどうだろうってね。お祭り騒ぎの裏で、住まいを追われ  
ようとしている者の存在を、東京の街中にアピールするんだ。どう、俺のアイデア、  
いいでしょ。

花 ああ……。

部長 俺等の懸念は、このイシがとてもウンチらしいということなんだ。

イシ かけっこもビリばかりで、バスケットもドッジも嫌でしかたなかった。いじめられて  
たしさ。

花 それは……、災難ですね。

イシ 花さんスポーツ得意でしょ。

花 ……ごめんなさい、出来ちゃうんですよね。

イシ ……出来ない人の気持ち、わかんないでしょ。惨めで、悔しくて、体育館の裏で泣  
いた……。

花 ……そういう気持ちも、あるものだなあと、思いました。

ミナミ イシちゃん、毎日工場の仕事帰りに2時間ランニングしてるのよ。

バタ ちゃんと食べたほうがいいんじゃないの。

花 食べないのはかえってストレスになりますし、レース前日に繊維質のものを避けるく  
らいでいいんです。

バタ じゃあ、焼き芋はお預けだな。

イシ ちえっ。

花 焼き芋なんて……、焼き芋なんてもつての他です。……イシさんのコーチは、ミナミ  
さん？

ミナミ 私は出来ないわよ、コーチなんて。……イシちゃん、介助と工場の仕事の合間に  
走るしかないから、この上トレニングなんかしたら死んじゃうわ。私、だからイシ  
ちゃんには、正直あんまり走ってほしくないのよ。

部長 イシ、リタイアして、花ちゃんに代わりに走ってもらうか。

花 えっ。

イシ 嫌。私、走りたいの。走り切って、アピールしたいの。

部長 今のお前じゃ、走り出す前にダウンだぞ。

バタ お前の兄貴も、街人中、走り回ってたね。

部長 ……自分の限界わきまえずに、無理するから。

イシ ……。

シスターが入ってくる。

シスター 部長、オカワリ、受付けましょう。私、買い出しに行ってきます。

部長 シスターが？ でも、外、仕切ってもらわなきゃ。

シスター テイさんがしっかり守って下さってますし。

部長 うーん、もうそろそろ集会の準備に移らないといけないし。

シスター ……求めよ、さらば与えられん。

部長 ……求めなさい、そうすればもらえます？

シスター だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

部長 ……ええ。

シスター そんなの、嘘じゃないか。

部長 ……。

シスター って言われちゃった。

部長 誰に？

シスター 今、二回目に並んでる、教会の裏に住んでる人。…弱い者は求めても奪わ

れるばかりじゃないかって。

部長 そう…。

シスター 教会も今、立ち退き検討する方向に、傾いてるから。

部長 嘘つきには、なりたくないね。

バタがキッチンに引っ込む。

花 あの、私、買い出し行ってきましようか。

部長 お願いできる？

花 はい！

イシ 野菜、残り見てくるね。

奥のキッチンにイシが引っ込む。

ミナミ 求めなさい、そうしなければいつまでたってももらえません。

シスター ……ミナミさん流の教え？  
ミナミ 求めなければ、始まりません。

キッチンからバタが頬を押さえて出てくる。  
イシが突然バタを殴った様子。

バタ いてえ……。

部長 何してんだよ、イシ！

イシ 酔っぱらい！

部長 ……。

イシ わかっているの、飲み続けてたら、死ぬのよ。

バタ ふん、ワンカップは俺の神様なの。求めますだからもらいます。

イシ ひどいよ、バタさん。もう、飲まないって、約束してたじゃない。

ミナミ イシちゃん、落ち着いてよ。

イシ もう、この酔っぱらい、信じられない。この前だって、部長が付き添って福祉で病院行くお金ももらったのに、帰りにそれで飲んでたんだ。

バタ ほっとけ、石頭。

部長 バタさん、炊き出し中には、みんな飲まないで頑張るって約束だろ。ルールは守ってよ。

外でテイの叫び声が聞こえる。

テイ キャー！

部長 何？！

梅里が、トイキの腕をねじり上げ掴んだまま入ってくる。

イシ トイキさん！

部長 おい、何してんだよ、離せよ。

梅里 こいつの娘がなめた真似しやがったんだよ。

ミナミ 梅里さん。

部長 誰。

イシ ヤクザの、……不動産の。

花 トイキさん、ハルちゃんは？！

トイキ ……バタさんのテントに行ったら、この人達がテント壊そうとしてて、……ハルが、ハルが中に立て籠もっちゃったの。

部長 テント壊す？

梅里 引きずりだそうとしたら、娘が飛びかかってきて、俺の財布奪い取りやがったんだ。

新車のキーもついてるのに……。

イシ それで、ハルちゃんは？

トイキ ……すごい早さで、走って逃げて……。どこに行ったかわかんないの……。

梅里 おい、ここにいるんだろう、ガキを出せよ。

バタ、走って出て行く。

イシ バタさん！

部長 待てよ、何でテントに手を出してんだよ、お前らが。

梅里 俺等、区からクリーニング大作戦、請け負ってるんだよ。

部長 クリーニング大作戦？ 抜き打ちでテント撤去ってことか。

梅里 文句言える立場じゃねえだろう。元々不法占拠なんだから。

テイが梅里に後ろからチョップし、梅里バランスを崩す。トイキはその隙に逃れる。

梅里 つてええ……。何すんだよ。

テイ、逃げる。

梅里、テイをつかまえようとする。

ミナミが梅里の前に車椅子を止める。

梅里 何ですか、ミナミさん。

ミナミ、動かない。

梅里 あんまり頑張つてでしゃばらないほうがいいですよ。下手したら、車椅子ごと川に浮かぶことになりますよ。

ミナミ ……。

エマが入ってくる。

エマ 梅里さん、組の人が警察とやりあってますよ。車が邪魔だとかどうとか言われてて。

梅里 ちくしょう、キーがねえんだよ！ キーが。

梅里、慌てて出て行く。

部長、イシ、テイ、トイキ、シスターも後を追う。

ロビーに残ったエマ、ミナミ、花。

二宮が入ってくる。

エマ ああ……、寿命が縮まった……。

ミナミ、外に行こうとする。

エマ 駄目よ、あんたが行ったって、何にも出来やしないでしょ。

エマ、ミナミの行く手をふさぐ。

ミナミ ……ぶつかることぐらい、出来るわ。

しばらくエマ、ミナミ、動かずに黙っている。

エマが少し、移動する。

ミナミ (花に) 花さん、ロビー番、お願いします。

花 でも……。

ミナミ 二宮くんのことも。

花 ……はい。

ミナミ、ロビーを出て行く。

エマ 一人で大きくなったような顔してき。

エマ、ロビーを出て行く。

ロビーに残った二宮と花。

二宮 二宮君のことをもって、「二宮君番」ってこと？ 俺も追いかけてようと思ったのに。

花 行きますか？

二宮 もう、いい。

花 ミナミさん、今、大変だから。

二宮 大変だとか関係なく、別に興味ないんですよ。ただの宿泊客ってだけで。

花 フフ。

二宮 何？

花 ここ、女性限定なんですよけどね。あなたは特例らしいですよ。

二宮 車椅子だからってことでしょ。

花 さあ……。

二宮 ……別に、いいんですけど。

花 二宮さん、お一人なんですか、今日。

二宮 ウエマツ君、今、区の人への抗議に熱入っちゃって。

花 ああ、そうなんだ……。

二宮 ……。

花 ……。

二宮 ごめんなさい、俺、人見知りなんですよ。話しづらいでしょ。

花 えっ。そんなことアニヨハセヨ。

二宮 え？ 韓国人？

花 そんなことはありませんよ。

二宮 ああ……、そうですか。

花 大丈夫ですか。何か困ってることとか、ありますか？

二宮 どういうジャンルで？

花 ジャンルって……。生活していく上でのこととか。

二宮 女の子の手を握って歩けない。

花 ……。

二宮 俺、小三くらいまでは歩けてたの。

花 え、そうなの？

二宮 うん、そこから、徐々に車椅子使い始めて。自分の病気知ったの、中学の教科書なの。

花 保健体育？

二宮 道徳。

花 道徳なんだ……。

二宮 それまで病気のこと、名前だけ知ってたけど、他のこと全然知らなかった。

花 親はそういうこと、隠してたの？

二宮 うん。まあ、隠してたっていうより、積極的に話さなかったってだけだけど。教科

書ペラペラめくってたなら、自分と同じ名前の病気の人が載ってたさ、あ、自分の病気はこんな病気で、将来こうなっていくんだって知ったわけ。

花 ……。

二宮 まだ、中学生で、どう受け止めていいか分からなくてさ。誰にも相談できなくて、

何か、自分を見失ったっつうか。

花 ……。

二宮 ごめん、何でもこんなことあなたに話し始めたのかわかんなくなってきた。困るよね、いきなりこんなこと言われても。

花、二宮の右手を掴んで、電動車椅子のレバーに載せ、自分の手を重ねる。

花 (レバーを動かして歩きながら) ほら、こうやって、一緒に歩けますよ。

二宮 でも、俺の身体、いつ、どこが動かなくなるか自分でもわかんないんだよね。

花 ……。

二宮 ……もし、この右手が、動かなくなったら？

花 ……、そしたら、また、方法を、考えます。

二人、一緒にロビーを歩く。

花 ね、もし、あなたがドラえもんになれたとしたら、何がしたいですか？

二宮 ドラえもん？

花 はい。

二宮 もしも僕が障害者じゃなかったらって、こと？ あなたの聞きたいのって。

花 うーん、そうね、何でも出来たら何するか？

二宮 パイロットになる。

花 へえ！ 私も飛ぶの大好き。

二宮 あなたは？

花 そうね、私は、タケコプターで簡単に飛びます。

二宮 フフ、ミニさんと話してたんだ、俺等にとっては、走ることも、空飛ぶことに似てるよねって。

花 ……。

二宮 今は、どっちも想像することしかできないもん。

花 ……歩く感覚は、覚えてる？

二宮 目をつぶると、歩けるくらいに覚えてる。

花 ……。

二宮 学校の屋上まで、階段上がる競走したり。帰り道、靴どろどろにして怒られてたり。地面に足跡、付けるの好きで、わざとそういう道通ってたの。

花 ……。

二宮 マラソンって、楽しい？

花 景色を自分の足で動かしてる感覚が、好きなの。トラック走るのは他の選手とのタイムの闘いだけど、マラソンで苦しいのは、本当に一人になった時の自分との闘い、っ

て気がする。

二宮 ああ、羨ましいなあ。

花 そう？

二宮 本当に、一人になってみたい。

花 ……でも、車椅子で1人暮らしって、24時間他人介助ってことでしょうか？

二宮 そうだよ、結局本当に一人は無理だもん。

花 ……。

二宮 でも、家族の負担は減らせるし。

花 準備、大変そう。

二宮 ……ドラえもんの最終回って知ってる？

花 知らない。

二宮 ドラえもんが、「このまま僕がいたら、いつまでたってもび太君が大人になれない」

って、未来に帰っちゃうの、置き手紙して。

花 えー……。

二宮 のびたは泣いて、困って、寂しくて、初めてドラえもんの気持ち分かるの、ああ、

そっか、いつまでもドラえもんに頼ってちゃいけないかったんだあって。それでのび

太は初めてジャイアンと対等のけんかをするの。

花 初めて聞いた。

二宮 俺の覚えてる最終回だから。

花 喧嘩して、勝つのかな。

二宮 たぶん、勝ちはしないんじゃない。

花 ……。

二宮 一人暮らししようって決めて、動き始めた時から、ようやくああ、自分生きてるな

って思い始めて。

花 うん。

二宮 ……。

花 うん。

二宮 ああ、のさ。

花 何？

二宮 ウエマツ君、どんな感じかな。

花 あ、呼びましようか？

二宮 お願いします。

花、窓の外を見る。

花 はい。(窓から眺めて) ……ウエマツ君、何だか、区の人とやり合ってるみたい……、

(二宮を見て) 今じゃなくちゃ駄目ですか? ……トイレ?

二宮 (頷く)

花 私、手伝いましょうか?

二宮 え?

花 あ。

二宮 ……。

花 ……。

二宮 いや、僕、その。

花 ええ、ですよ、はい。

二宮 ……お願い、出来ますか。

花、頷く。

花と二宮、ロビーから出て行く。

トイキが入ってきて、ぼんやりしている。トイキは鳥籠くらいの大きさの籠を持っている。

イシ、テイ、バタ、ミナミが入ってくる。

ミナミ、車椅子専用のレインコートをテイに着せてもらっている。

テイ いやあ、キモ潰したね。

イシ トイキさん、ハルちゃんは?

トイキ 駅前のファミレスにいる。知り合いについててもらってる。

テイ 迎えに行つてあげなよ。

トイキ ……ほとぼりが冷めてから。

イシ ねえ、ミナミさん、今日だけでもバタさん、ロビーに泊めてあげられないかな。

ミナミ ……。

イシ 雨も降ってきたし、布団もないし、路上は辛いよ。

トイキ バタさんには感謝してる。

バタ ……。

トイキ あの子、震えてたわ、テントの中でハムスターみたいに。バタさんの布団かぶって、じっとしてた。

バタ ……すまん。

トイキ ……あの子が、ヤクザに飛びかかって行った時、心臓が止まるかと思ったわ。あんなこと、できる子だったんだって、思った。私にも、あの子の父親にも、あんな必死の姿、見せたことなかった。……きっとバタさんみたいなお父さんだったらよかつたのね。

バタ ……。

トイキ 私からあの子を、とらないでほしいの。

花が戻ってくる。

花 延期されたんですって、撤去。

テイ ん、まあ、とりあえずだけでもね。でも半分壊されたテントもあって、バタさんの荷物と布団、リアカーもなくなっちゃってるの。

イシ バタさん、身体悪いし、一晩だけでも……。

トイキ バタさんには、もう、ハルに会わないでほしいの。

イシ そんな、せっかくなついてるのに……。

トイキ どれだけ私達が恐い目にあつたのかわかつてる？ ハルのトラウマになっちゃうかもしれないのよ？

テイ でも、ハルちゃん、あの、ウメとかいう人とやり合ってたんでしよう。トイキさんが思ってるより、ヤワじゃないんじゃない？

トイキ ……次こういうことがあつたら、無事で済むかわからないのよ？

イシ その、……いいの？ そういう、イシツな物には近寄らせないっていう、子育て。

トイキ もう、放っておいて下さい。

イシ そこまで言うんだつたら、私達頼らないで、一人で世話してよ。できないでしょう。当たり前だよ。イキモノ育てるの、大変なんだから。二年間放っておいて、いきなり母親には戻れないよ。

テイ 一人で抱え込むことはないって、イシちゃんは言いたいのよ。ここはチーム「リヴアップール」だからね。サッカーじゃないけど。

トイキ ……。

イシ 公園のテントが危ないっていうんなら、ここだって同じことだよ。いつ、どういうことになるかわからないのよ？ 恐いんだつたら出てきやいでしょ。アパート借りて、ハルと暮らせばいいじゃん。

トイキ ……ハルに、どうして人の財布取つたのって聞いたら、絡んできた人からは、カツ上げしていいんだつて。

バタ あ。

イシ え？

トイキ バタさんからやり方教わつたつて。

バタ だつてよ、この頃の公園、ガキが新聞に火つけて放り投げたりしてくんの。この前は顔見知りかぼこぼこにされてよお。そういう世の中を渡り歩いていくための術をだな、ハルちゃんにも、だな。

トイキ こんな人と付き合わせるの？

イシ かばいづらい……。

トイキ アル中の人、ロビーに泊めるわけ？ ミナミさん、そんなところだったら、私、  
いられないわ。

バタ ……ダンボール拾い、一緒に行く約束したのにな、残念。あの子、俺のテントで言  
つてたよ。バタさんは、帰る家があつていいなあつて。

トイキ ……。

バタ ちゃんと家、作ってあげなよ。

トイキ ……。

トイキ、イシに籠を押しつけ、出て行く。

イシ ……。(テイに籠を押し出す)

テイ ……。(花に押し出す。花、流れで受け取る)

花 (発言せよという圧力を感じ) ……私は、何とも……。

ミナミ イシちゃん、ルールだもの。もう、無理だよ。

イシ、突然床に倒れる。

死んだように動かない。

ミナミ イシちゃん？

テイ イシちゃん、ねえ、大丈夫？ (イシを揺り動かす)

花 イシさん、……顔真っ青。貧血じゃないでしょうか。

バタ イシ、イシ、……救急車。

イシ (ぴくりともしないまま) 私、そんなの、嫌なんです。

ミナミ ……。

イシ この場所、そんな場所じゃないでしょ、ミナミさん。そんな、隣に住んでる人も助  
けられないようなベッドハウスなら、なくなったって構わないですよ。ミナミさんだ  
って、本当は助けたいと思ってるんでしょう。だったら、反対する人がいたって、私  
達、もつと頑固に、自分が正しいと思うことを、主張したっていいんじゃないですか。

ミナミ きりがないんだって。この辺のホームレスの人達全部泊めるつもり？ 私達決め

たでしょう。一人でも嫌だっていう人がいることはやらない。迷った時は自分達の決

めたルールを守ることが、自分を守ってくれるんだってあんたの兄貴も言ってたわよ。

イシ あんな、兄貴のいうことなんて……。

ミナミ それに、バタさんは炊き出し中にお酒飲んだ。最低限のルールを守れなかったの  
よ。ごめんなさい、泊められません。

イシ ルール、ルールって……。私達だって、自分で、こうしたいと思っても、自分をコ  
ントロールできないことくらい、あるじゃないですか。お兄ちゃんが死んだ時だって、

あなた、散々苦しんだ。自分が自分で立つことが出来て、すぐに二階に駆け上がれたら、あの人は助かったかもしれないんだって。でも、あなたが階段這ってるうちに、兄貴の息が止まったとしても、そんなこと、誰が責められます？

ミナミ ……。

バタ イシ、いいんだって、俺、気兼ねなく寝られるところで寝るのがいいからさ。

部長とウエマツがオルガンを運んでくる。

部長 ちょっとこれ、ロビー置かせてよ。…イシ、どうしたの、ダイ・イン？

花 貧血みたいです。

部長 だから無理するなって言ったのにさあ、オルガン入れさせてよ。雨で駄目になちゃうから。

(イシを抱えて、優しく移動させる)

バタ これ、鳴るの？

部長 わかんない、寄付だから、まだチェックしてない。ミナミさん、もうすぐだよ、スピーチ。

ミナミ ごめん、行ってくる。(花に) 来てくれます？

花 はい。

ウエマツ 花さん、今月の『ランナーズハイ』、見ましたよ。

花 え…。

ウエマツ 「翼の折れたエンジェル」マラソンへの挑戦に失敗。ってやつ。前のレースからの分析。

花 いや、あの時、もう、マスコミや陸連に散々絞られちゃって…。

ウエマツ そんなこと、気にしないで。ファンは見たいですよ、マラソン走ってるの。…

…いつまでここにいらっしやるんですか？

花 ……。

ウエマツ インターバルのタイム取りとか、できる範囲でヘルパーやります。

花 ありがとうございます。

ミナミ、花出て行く。

部長 道理で街中、疾走してるわけだ。

ウエマツ はい。俺、あの大会の中継、よく覚えてるんですよ。膝の怪我と脱水症

状と熱中症と花粉症を併発しながらも、最後まで意地で走って。

部長 ……すごいな。

ウエマツ ゴールした後、監督に抱えられて、意識朦朧としたみたいなんですけどね、ま

だ、足が動いてるんですよ。その、足が空を切って走ってるの。  
テイ やはり、タダモノではなかったか。

イシ ……。

バタ (バタ、オルガンを鳴らして) これ、鳴るよ。

部長 年末の、越冬闘争も手伝いに来いよ。……卒業できそうだったら。  
ウエマツ はい、来ます。

部長、出て行く。ウエマツとテイ出て行く。

イシ バタさんもオルガンだったら、簡単に泊まれるのに。

バタ そんなにいい音出ねえよ。

バタ、軽く曲のようなものを弾く(バッハの『目覚めよと呼ぶ声あり』)。(

イシ いいな、私も弾きたいな、その曲。

バタ 音符覚えてねえよ。

イシ 何で弾けるの。

バタ こういうのは指が覚えてるの。

バタ、記憶を辿るように曲を弾く。

イシ フフ、バタさん、本当によく覚えてるね。

バタ ……。

イシ ねえ。

バタ ……家に帰る道も、足が覚えてるといいんだけどね。

イシ ……。

しとしとと降る雨の音と混じり合うオルガンの音。

溶暗。

#### ※ルート4 上り坂※

(路上にて)

ミナミと花が共に歩いている。(ミナミは車椅子)

その内自然と花が加速していく。花は気付いてかなり慎重にスピードを落とそうとする。

ミナミ 私の中にリズムがあるの、分かる？

花 リズム？ 走る時の、リズムみたいなものですか。

ミナミ 私はいつも同じ速度で走っているから、どのくらいの時間で自分がこの踏み切りを渡りきれるか、信号の青に間に合うか、感覚的に分かるの。正確なリズムを刻んでいるの。

花 ええ。

ミナミ あなたは歩いてると、段々リズムが狂ってくよね。

花 ……私、歩いてても、走ってても、調子乗ってどんどん速くなってく癖があるんです。

ミナミ 知ってる。

花 はい。

ミナミ 介助者としての、トレーニング。

花 ……。

ミナミ カレー、ステーキ、ワントアンメン。カレー……、私と歩く時、リズムをとってみて。カレー、ステーキ、ワントアンメン、カレー、ステーキ、ワントアンメンって。

花 ……何ですか、それは。

ミナミ そう唱えながら、私をペースメーカーカードと思って、一日一回、一緒に私の言うコースを歩くの。時速6キロのペースメーカー。別にあなた、走るのが好きだったら走っても良いのよ。

花 時速6キロで走ると、もも上げになっちゃいますよ。

ミナミ もも上げでもいいんじゃない？

花 ……。

ミナミ 後ろの鞆から、ビニール袋に入ったチラシの束を取ってくれる？

花 はい。

花、ミナミの鞆からチラシを取る。

花 (チラシをみて)「介助者募集」？

ミナミ それ、撒くんです。

花 はい。

ミナミ トレーニングですから。

花 ……カレー、ステーキ、ワントアンメン。

二人、唱えながら一緒に歩き去っていく。

(ロビーにて)

エマと梅里が話している。

梅里 小さい時俺んち貧乏でね、親父もお袋も朝から晩まで働きづめで、俺は日本脳炎で頭のイカれたしゃべれないおじさんに面倒見てもらってたらしいんですよ。小学校あがるまでほとんど毎日預けられてたな。小学校あがってからも遊びにいくとかわいがってくれてね、中学校くらいで、あ、俺の方が大人になっちゃったって思った。変な感じだったね。後で思ったらそれが俺の「シヨウガイ者」との初めての出会いだったんだろうなって思うんですよ。だからじゃないですけど、俺もそういう人達に多少の理解があるつもりなんですよ。

エマ ……それはどうも、ありがとうございます。

梅里 ミナミさんにも、「シンキンカン」を持てるんですよ。だから、安心して、お母さんがこうして協力してくださる以上、悪いようにはしませんから。

エマ ……その、日本脳炎の人。

梅里 はい？

エマ その人のこと、いつから「障害者」だと思った？

梅里 いつって。

エマ ……あなたにとってその人は、「おじさん」だったわけでしょう、「シヨウガイ者」ではなく。

梅里 ……そうですね。

エマ 今はどう？ 今もそう思える？

梅里 ……。

梅里の携帯電話が着信を受けている様子。梅里、電話を取る。

梅里 ちよつと失礼。(キッチンの奥の方へ行きながら) あ、あんたか、え、言ってみいや。……ああ、ああ、大丈夫、大丈夫、俺はどっちでもいいんだよ、お前んとこの店、火いつけたら済む話なんだからよ。あんま意地はんなや。

テイがロビーに入ってくる。

テイ お母さん、ごめんなさい。遅くなっちゃった。(梅里に気づき身を固くする)

エマ テイさん、お呼び立てして悪いわね。

テイ いえ、どういたしまして。

梅里 (電話を切り) テイさん、昨日はどうも。

テイ ……どういたしまして。

エマ テイさん、これ。(封筒を差し出す)

テイ (中身を見て) ……どうして。

エマ この前銭湯で一緒になった時、すぐ分かったわ。ささやかだけど。

テイ ……どうして。

エマ 介助の仕事はもう、やめた方がいいわ。腰に力入っちゃうでしょう。

テイ 私、まだ、働きますよ。

エマ あなた、生まないつもりなの？

テイ ……。

梅里 確かにオーバーステイじゃ、産婦人科にかかる金もバカにならないだろうね。

テイ ……。

梅里 仕事紹介しようか。中国人の女の子、たくさん斡旋してる店があるから。

住み込みで出来るともありますよ。夜の仕事になるけど。

テイ ……お母さん、どうして。

エマ ……あの子、危なっかしくて見てられないのよ。

テイ ……。

エマ 私がなんとかしなきゃ。

テイ ……私、ミナミさんとカラオケ、行きました。

エマ へ？

テイ ミナミさん、やっぱり上手く歌えないし、私は日本語の歌あんまり知らないから適

当に歌うし。でも、何か歌いたくて、行ったんですよ。おかしくてケラケラ二人で笑

っちゃった。

エマ ……。

テイ 映画にも行きました。甲子園にも。デイズニールランドにも。

エマ ……。

テイ 色んなとこ、行って、色んなことして、やりたいと思ったこと、みんなホントにな

った。

エマ ……。

テイ ミナミさん、タコでも動きません。いっぺん決めたら。

エマ ……ええ、わかってるわ。

テイ 私もそうできるね、ここにいたら。

梅里 国に帰ったら？

テイ ……。

梅里 長野オリンピックの時、大会前に施設建設現場で働いてた違法滞在の外国人、摘発

されたんだって、知ってる？ 行政の「環境浄化運動」で。

テイ ……。

梅里 ここに居座ってたら、不法滞在って名目で、国に帰されちゃうよ。それ雇ってる経

営者も罪に問われるだろうね。

テイ ……。

ミナミがロビーに入ってくる。

ミナミ 来たなの？

エマ お帰り。

梅里 お邪魔してます。

ミナミ (テイの様子を見て) ……どうしたの。

テイ ……。

ミナミ ……。

テイ、出て行く。

ミナミ 何？

エマ ……ねえ、ミナミ。あんたは本当によく頑張ってきたわ。ここを離れて得られる元手で、それをもっと大きな事業に展開していく、って選択肢をとったほうがいいんじゃないかしら…、って、梅里さんはおっしゃるのよ。

梅里 ええ、その通り。お母さん、分かっているよ。

エマ あなたがこの辺の日雇いの労働者、ホームレスの人達の気持に寄り添ってやってきたのは分かるわ。けど何も、あなたが無理して頑張らなければって、思うことないんじゃないかしら…、って梅里さんはおっしゃってるのよ。

梅里 そう、その通り。さすがお母さん。

エマ 自分のためだったら、引越した方が良くわ。ううん、もし、人のためっていうんでも、尚更、一刻も早く立ち退くこと決めた方がいい。テイさんも、オーバーステイなら他に言ってもらった方がいいだろうし、トイキさんだって、娘さんと一緒に住むべきよ。花ちゃんが、早く陸上に戻った方がいいのは明らかだし…。人の人生振り回してる責任、あるのよ。

ミナミ ……。

エマ ……ねえ、どうしてそんなに、ここにこだわるの？

ミナミ ……この街を、「ショウガイ」持っても安心して暮らしていけるところにするの。そのためには私の事業所が必要なの、ここに。

エマ ……あんたは自分だけじゃ生活していけないのよ。

ミナミ ……そんなの、誰だってそうじゃない。

エマ ……。

梅里 ミナミさん、俺もこの街の人間だから、あんたの気持は分からなくはない。日雇い

や路上の連中に仕事振って、あの人らの生活支えてきたつもりだ。だが、街は時代と共に動いてかないと腐っていく。連中だって、ここがなくなれば、また違う場所へ流れていくだけのことだ。

エマ 今、自分の介助者も足りない状況で、新しいお客さんも、抱えられないでしょう。もし、私が動けなくなったら、施設に行かないやならなくなるのよ、このままだと。  
ミナミ ……。

イシがロビーに入ってくる。

イシ (ミナミに) 参っちゃった。見付からない。

ミナミ そう。

エマ どうしたの。

イシ バタさんが、昨日行方眩ませちゃったんです、フリマの売り上げ持ったまま。

エマ え、バタさんが？

梅里 俺、今朝、会ったよ。

イシ えっ、どこで？

梅里 川沿い真っ直ぐずっと進んで曲がったところの、ピンクの看板の酒屋の前。

イシ そんな所に？

梅里 リアカー取られて、大分弱ってたみたいだぜ。

イシ 本当？

ミナミ イシちゃん、今、行ってくる？

イシ いい？ なるべくすぐ、戻ってきますから。

ミナミ いいよ。

イシ ちよつと、案内してくれます。

梅里 え、俺が。やだよ。

イシ お願いします。お願いします。(頭を下げる)

梅里 ……あーあ、ちよつとヤクザ、飽きてきたな。

ミナミ ……。

梅里 新車乗せてやろうか。

イシ 嫌です。何されるかわからない。

梅里 ふん、じゃ、また改めますんで。

イシ、梅里出て行く。

エマ ……ここで家族三人、テレビ見てたわね。キッチンはもっと狭かった。壁だって、

あんたがしょっちゅうぶつかってたからぼろぼろだった。二年前、あんたが生まれ変

わらせた。二階に上がるエレベーターつけるのだって、無理矢理だから苦労したわね。  
ミナミ ……。

エマ あの時間が初めてだったわね、あんたが私に借金申し込んだの。あんたから何か返してもらうなんて、思ったことなかったから、びっくりしたわ。

ミナミ それまではもらうことしかできなかったの。返すあてがなかったから。

エマ 借金はもう、帳消しでいいわ。

ミナミ ……。

エマ あなたの持っている分のこの土地がほしいの。

ミナミ ……。

エマ ……この土地権の半分、私の持つてる分、譲渡しようと思ってるのよ。

ミナミ ……。

エマ あなたも、考えてくれないかしら。

ミナミ お母さん、今日は、帰ってくれる。

エマ ……。

入ってくる花、二宮。

花 ミナミさん。あ、お母さん、こんばんは。

エマ どうも。

二宮 こんばんは。

エマ ……お出かけ？ 二人で。

花 ええ。この辺散歩こうかかって行ってるんですけど、二宮くんが、ミナミさんも誘おうって。

二宮 ちよつと、誘おうって行つたの、自分でしょ。

花 フフ。

エマ そう、いってらっしゃい。ミナミ、またね。

エマ、ロビーを出て行く。

ミナミ ごめん、私、いいや。

花 え、駄目ですか？ イシさん帰って来るまで待ちますよ。

ミナミ ううん、いい。仕事がたまつて。…ウエマツ君は？

二宮 彼、なんか、浦和レッズの試合見に行かなきゃいけないらしくて。

ミナミ そう…。じゃあ、二人で、行ってきて。

花 でも、ミナミさん、一人になっちゃうじゃないですか。

ミナミ たまには一人になりたいんです。

花 …… (二宮に) 今日、やめておこうか。

二宮 そうだね。

ミナミ だからいいって言ってるじゃない。もう、放っておいてよ。

花 …… ミナミさん、何か、あったんですか？

ミナミ 何ありません。

花 (二宮に) ごめん、今日は、ちよつと……。

二宮 うん、俺、行くね。

ミナミ いいって言ってるでしょ。何回も言わせないでよ。

花 …… 出られませんよ。だって……、一人になりたくない、なりたくないって。

ミナミ 私が？ 余計なお世話なんです。

二宮 俺、邪魔だよね (行こうとする)

ミナミ 邪魔じゃないです。

二宮 ……。

ミナミ いてください。

二宮 ……。

ミナミ 嘘、いないでください。

花 いますよ。

ミナミ 今はあなたの介助の時間じゃないんです。

花 だから、いますよ。

ミナミ …… だから、いないでください。

花 何で？ 私がただの介助者だからいてはいけないんですか？ 正直に言ってください。

ミナミ ……。

花 わがままを押し通す、なんてかつこいいことって、ミナミさん、本当にしてほしいこと、言えないじゃないですか。私、ミナミさんの本当にわがままな「お願い」を

聞きたいんです。

ミナミ あなたに、どれが私の本当の気持かわかるわけがないでしょ。

花 …… わかりません。だから今、「何でも音声機」がほしいんです……。

ミナミ 本当は、あなたを二人きりにしたくないんです、二宮君と。

花 ……。

ミナミ 本当は私、二宮君とセックスがしたいから、手伝ってもらえるかな？

花 ……。

ミナミ いい？

花 ……。

ミナミ 手伝ってもらわないと出来ないじゃない。

花 ……。

二宮 …… 俺、冗談通じないんですから。

ミナミ ……。

二宮 ミナミさん、俺とする勇氣、あるんですか。

ミナミ ……。

二宮 ……。

二宮、黙ったまま去っていく。

ミナミ、花は残った状態。

ロビーの電話が鳴る。

ミナミ、花、二人とも動かない。

テイが慌ててロビーに入ってくる。

テイ あれ？ 花ちゃんいたの？

テイ、受話器を取る。

テイ はい、ベッドハウス「リヴアップル」です。 ……え？ ……わかりました。

テイ、受話器を耳から放す。

テイ ……浮浪者が、血塗れで、全身殴られて死んでるって。警察から。

ミナミ ……。

テイ お金と、うちの領収書がいっぱい入った封筒持ってるから、確認しにきて欲しいって。

ミナミ ……テイさん。一緒に来てくれますか？

テイ ……はい。

ミナミ、アテトーゼがひどくなり、上手く車椅子が動かせない。

テイ ミナミさん、大丈夫？

ミナミ ……。

テイ ミナミさん？

ミナミ ごめん。テイさん、行って来て、もらえませんか。

テイ 分かりました。

テイ、ロビーを出て行く。

ロビーに残ったままのミナミと花。

(夜、ロビー)

ミナミ 花さん、彼の遺稿集の原稿、出してもらえますか？  
花 はい。

花、原稿を譜面台に立てる。

ミナミ 38ページ、開いてもらえますか。

イシが入ってくる。

オルガンの前に座り、しばらく黙ったままにいる。

オルガンの蓋を開ける。

イシ、中に紙切れが入っているのに気づき、手に取る。

イシ (紙切れを見ながら) バタさんの字……。ド、ファソラ、ラ、ソ、シ、ラ、ド、シ、

ラファソ、シ、ラ、ミ、ファ。

イシ、オルガンを弾こうとするが、上手く弾けない。

イシ、オルガンの上にうつぶせになる。

バタが現れる。

ミナミ、開かれた原稿を読み始める。

バタ へたくそだねえ、ホントに。

ミナミ 路上で男が犬と並んで立ち小便をしていた。最後まで息ぴったりの様子に見とれていると、その男が声を掛けてきた。それがバタとの出会いだった。公園のテントで生活しているという。ここに流れ着くまでに、想像もつかないくらい大変な目に遭っているような、憂いを帯びた顔をとまに見せる。すこぶる酒が好きなようで、飲まないかと誘われる。公園でワンカップを一杯。僕が街を駆け回っているのを、見たことがあるという。まるで早死にするような呑み方だ。

イシ (つぶやく) 馬鹿野郎、酔っぱらい。

バタ いひひ、もう死んでるから、あいつに気兼ねなく飲めるね。

ミナミ 子供の頃から施設を転々とした話、13でヤクザのカシラを殺った話、ギャンブルで一千万儲けた話、皇族の娘と駆け落ちした話、飯場にライオンが出た話、本当か嘘かわからない話を聞かされる。不思議と人をほっとさせるところがあるのは何故だろうか？ 現実を受け入れながらも、したたかに自由を選び通そうとする精神に触れた

思いがした。

バタ お前には簡単なの、教えてやるよ。

バタ、イシの手をとって、「ホ、ホ、ホタル来い」の音楽を弾く。

バタ 最後に歩道橋から見た、操車場のポツポツ付いている明かりがみんな葱の先っぽの  
蛸みたいに見えてね。ああ、いつのまに帰って来たんだろうって思ったよ。

ミナミ 友達にはなれないかもしれない。だが、仲間だと思う。……いつかこの男が路上  
で冷たくなっているのを見つける朝が来るのだろうか。だが、たった今、彼から学ぶ  
ものはあまりにも大きい。飄々と、放っておくとどこまでも歩いていきそうな後ろ姿  
を見送った。自分もああ、なれるものだろうか。

イシ 忘れちゃう……。ここにいた人たちのこと、みんな忘れちゃう……。

バタ 大丈夫だよ。一人じゃあるまいし。

イシ ……。

バタの弾くオルガンの音楽が、バッハの『目覚めよと呼ぶ声あり』のメロデ  
イーに変わっていく。

イシ、動く鍵盤をじっと見つめている。

溶暗

### ※ルート5 下り坂※

(ロビーにて)

イシ、その場跳躍をしているが、もう、上がるに上がれない状態。

花は軽々とそれをこなしている。

テイがそれを眺めている。

花 イシさん、無理しないでください。少し休憩しましょう。

イシ 嫌。

テイ マラソンの人って、何であんな苦しい思いをしてまで、走るのかな。

花 それは、乗り越えた時の風を感じたいからですよ。

テイ それ、オツカレビル楽しんで仕事する親父と同じだよね。

花 ……そうは思いたくない。

テイ ……私ね、お客さんが入院して、病院まで介助に行ってたことがあるの。

花 入院介助。

テイ その人、寝たきりで、始終全身痛がってて、注文も細かいの。「だから中国人はだめなんだ」とか言われて、私、たまんなくて仕事終って泣きながら病院出たのね。

花 ひー。

イシ 私も、そういう人当たったことある。もう辞めてやるって思った。

テイ (頷いて) 相手の言うことニコニコ聞いて、思い通りに出来ないと怒鳴られたり、無視されたり、奴隷みたいじゃないかって、むかついてたの。でも、病院出たらすぐ桜が満開に、綺麗に咲いててさ。それ見とれてたら、急に、ああ、私はあの人といてどんなにつらくても、仕事の時間が終わればその事忘れて、色んなものを見ていられるけど、あの人はこんなすぐ側に桜が咲いてる事も知らないでベッドの上にいるんだ、自分の障害からずっと、逃げることも、それ忘れることも、できないんだなあって、そう思ったら、あの人が抱えてる痛みなんてものを、結局私はミジンコもわかってないなって気付いたのよ。そしたら、何だかすがすがしく感じたんだよね。

花 すがすがしい？

テイ ……これ、日本語使い方合ってるかな。「すがすがしい」って。

花 用法は合ってますよ。……ミジンコの方が気になりますけど。

イシ、その場跳躍を始めている。

ロビーに松葉杖をついた身なりのいい男性、ヨシオが入ってくる。

ヨシオ (イシの姿をみて躊躇しながら) あの、ここ、ホテルですよ。部屋、空いてます？

イシ あの、申し訳ないんですが、うちは女性限定なんですよ。

ヨシオ え、そうなの。

イシ ええ。

ヨシオ 朝、車椅子の男性と、後一人男性が入って行くの見たんですけど。

イシ あの子は、車椅子だから特例で……。

ヨシオ 障害を持ってたらいいんですか？ それなら俺も…… (松葉杖を示す)

テイ ……私達には、判断できないんですよ。経営者とそのジュウチンが今留守なんですから。……歯医者だっけ？ もうすぐ帰ってくるかな。

花 悪いんですけど、他のところ、当たってもらえます？

ヨシオ そんな…… (めまいを起こしたらしく) あ、ちよっと。

花 どうなさいました！

ヨシオ すみません。

テイ お加減、悪そうですね。

ヨシオ、椅子に横になる。

花 大丈夫ですか。

ヨシオ ちょっと貧血気味でして……。すみません、すぐ治ります。

ロビーにトイキとミナミが入ってくる。

ミナミ ただいま。

テイ おかえんなさい。

イシ おかえんなさい。

トイキ、寝ているヨシオの姿を見て、息を止める。

ヨシオがトイキを見て立ち上がる。トイキ、反射的に部屋の隅に逃げる。

ミナミ ……お客さん？

イシ トイキさん、どうしたの。

テイ お客さん、ちょっと、気分悪くなさったみたいで。

ヨシオ（トイキの元夫） 元気なのか。

トイキ ……。

テイ トイキさん、知り合い？

ヨシオ 久しぶりだな。

テイ ……。

ヨシオ サツ、あ……。

ヨシオ、トイキの逃げた方に行こうとするが、ミナミの車椅子の動く方向とぶつかりよろめく。

ヨシオ うう……。 （再び椅子に横たわる）

ミナミ あ、ごめんなさい。

ヨシオ いえ。

ヨシオ、再びミナミの横をすり抜けて行こうとするが、ミナミが気を使ってよけた方向が同じであり、ぶつかってよろめく。

ヨシオ ……。

ミナミ ごめんなさい……。

ヨシオ ちょっと、あいつと二人にしてもらえませんか。大事な話があるんで。（と言いな

がら、ふらっと倒れる)  
花！

花、イシ、倒れかけるヨシオを慌てて支える。

ヨシオ おい、サツ子。頼む、話を聞いてくれ。皆さん、どうか、家の中の話ですので…。

イシ こんな状況で二人にしてくれって言われても……。

テイ トイキさん、何か、かわいそうだよこの方……。

トイキ、おそるおそるヨシオに近寄る。

トイキ 大丈夫よ、みんな、ありがとう。

イシ、花、ヨシオを椅子に座らせる。ミナミ、黙ってロビーから出て行く。  
それにテイ、イシ、花が続く。

ヨシオ 娘に会う権利はあるだろう。

ヨシオ、椅子の上に突っ伏している。

トイキ 調子悪いの？

ヨシオ お前と顔合わせるといつもそうだ。

トイキ ……。

ヨシオ ちよ、ちよつと休ませてくれ。

トイキ ……。

テイ (顔を出し) トイキさん、大丈夫？

トイキ 話が進まないのよ。

ヨシオ (かろうじて顔を上げて) 人が松葉杖だと思っただけなめやがって……。

トイキ ……。

ヨシオ ……ハルが帰るまで、待つ。

トイキ ……ねえ、あの子と話してみるから、また改めてにしてくれない？

ヨシオ 自分だけ勝手に逃げ出しておいて母親面か。

トイキ ……信じてもらえるかわからないけど、あの子、ここに来てから明るくなったのよ。

ヨシオ 何を根拠にそんなことを。(興奮して気分が悪くなり、ダウン)

トイキ ……あの子をかawaiiがってくれた人がいて。あの人見知りの子がなついでるから、一緒に何をして遊んでるのかって聞いたら、ひたすら二人で歩いてたって言うのよ。

この街中、アルミ缶拾いながら。

ヨシオ ボランテニアは賛成だ。

トイキ ボランテニアではないけど……。あの子、自分が缶見付けるのが素早いから、バタさん「筋がいい」って大喜びしてたらしいの。私達、あの子のやること、ちゃんと褒めてあげたことあった？ あの子と同じ目線で一緒に遊んだことあった？

ヨシオ 俺は八景島シーパラダイスにも連れて行った。

トイキ そういうことではないのよ。私もやっとなの子のペースが掴めてきたところなのよ。……少し、時間をくれない？ また改めて……。

ヨシオ お前がいなくなっから、俺はアトピーの食生活まで研究してるんだ。ハルには不自由なくさせてる。あいつはお前そっくりでわがままだから多少手は焼く。だが今更お前が出る幕はない。

トイキ ……。

ヨシオ (強い口調で) ハルに会わせてくれ。

テイ、イシ、花が音楽とともに現れる。遅れてミナミも現れる。

ヨシオ 何なんですか、あなた達。

テイ 必殺カイジヨ人です。

イシ ここは私達の家ですので、勝手なことされちゃ困ります。

花 私、ハルちゃんと同じ日に、ここに来ました、ハルちゃんの同期です。

トイキ ……みんな、大丈夫なのよ。

テイ あれ、出るマクなかつた？ もしかして。

ヨシオ ……私はハルの父親です。

イシ 私達、今、お母さんとハルちゃんが住むアパートを探しているんです。

ヨシオ サツ子……、お前、俺からあいつを取る気か？

トイキ ……あの子、ここに来てから掻きむしる癖、治ったのよ。

ヨシオ ……。

トイキ あの子の手首に傷、あつたわ。そこまで追いつめられてたのよ。あなたのところ

へ返すわけにはいかない。

ヨシオ それは、お前のやったブレスレッドのせいだ。

トイキ ……え。

ヨシオ あいつはお前にもらつたそのせいで手首の湿疹がひどくなったんだ。

トイキ ……。

ヨシオ あいつは嫌がつて外さなかつた。俺はそれをとつてやろうとしてもみ合いになつ

て、それで階段から落ちたんだ。あいつも手首をぎっくり切って……。

トイキ リストカットじゃなかったんだー！

ヨシオ 入院中、何となく、予感はしてたんだ、こういうことになるんじゃないかって。  
トイキ ……。

ヨシオ ……あいつに、新しい母親を作ってもいいかと聞いたんだ。嫌だといいやがる。

トイキ ……再婚するの？

ヨシオ あいつ次第だ。

トイキ ……。

ヨシオ なついていたと思った。一緒に育ててるつもりだった、ハムスターも……。あいつがねだつて、ママと呼ぶつて約束で買ってやつて……。ようやく三人で暮らせると思つた。

トイキ、ハムスター籠をヨシオに渡す。

トイキ あの子ハムちゃん見て、自分と同じだと思つたつて。

ヨシオ ……。

トイキ 迎えに行かせるから、必ず。

ヨシオ ……。

ヨシオ、立ち上がる。

トイキ 不自由そうね。

ヨシオ 不器用なんだよ。

ヨシオ、出て行く。

トイキ アパート探してる、なんて……。

ミナミ 言つたからには、探さないかね。

トイキ (頷く)

イシ ミナミさん、ごめん。勝手なこと言つて。

ミナミ ……

イシ 私も、探してるの。

ミナミ ……。

イシ 労働者の権利もクソもないうちの工場、アサリさん達と一緒に変えてこうつて、決めたの。食品衛生協会で働きながら、勉強する。……本部、大阪なの。

ミナミ ……そう。

イシ ……自分の足下から、変えていこうって決めたの。お兄ちゃんの後ばかり追いかけててもしょうがない。

ミナミ ……うん。

イシ ……。

イシ、ロビーを出て行く。

トイキ ……ハル、迎えに言ってくる。

ミナミ うん。

花 いったらっしやい。

トイキ、ミナミ、テイ、花に深々と礼をする。

トイキ、微笑んで、ロビーを出て行く。

二宮が現れる。

ウエマツが荷物を持って、二宮の後ろにいる。

ミナミ ……どうしたの。

二宮 ばあちゃんが、調子悪くなって。本当はもっと早く帰る予定だったんだけど、ここに長い過ぎちゃった。

ミナミ ……。

二宮 ……。

ミナミ 二人にしてもらえますか。

花 ……。

ウエマツ ……。

花、テイ、ウエマツ出て行く。

ミナミ ……この間は、ごめんなさい。

二宮 ……いえ、俺も、むきになっちゃって。

ミナミ きかん気と居直り、本当は私、実践できてないんです。

二宮 でも、俺達の間だったら、必要ないですよね、それ。

ミナミ ……近寄ってもいい。

二宮 はい。

ミナミ 上手く止まれないかもしれません。

二宮 ええ、俺、電動椅子サッカーで鍛えられてるから、ぶつかりそうだったら結構素

早くまだ、よけられますから。大丈夫です。

ミナミ ……。

二宮 嘘です。よけませんから、絶対。

ミナミ、二宮の車椅子の近くまで自分の車椅子を動かす。

二人、しばらくお互いを見つめている。

ミナミ、ゆっくりと身を乗り出す。

二宮、少しだけ動く。

ミナミの唇が二宮のほっぺたに触る。ミナミ、バランスを崩して、二宮に倒れかかる体勢になる。

二人、しばらくじっとしている。

ミナミ すっごい音、聞こえる、心臓の。

二宮 ばくばくいってますもん。今。

ミナミ ……。

二宮 ……俺、一人暮らししたら、遊びに来て下さいね。

ミナミ ……はい。

二宮 泊まりでお願いします。

ミナミ ……はい。

花が入ってくる。はっとして出て行こうとする。

ミナミ 花さん。

花 ……。

ミナミ 私を、起こしてくれる。

花、ミナミを起こして二宮から離すかと、思いきや、ミナミの唇を二宮のほっぺたにくっつける。花はミナミの頭を支えつつも見ないふりをしている。  
ウエマツが入ってきている。

ウエマツ ……鍵、返したから。延長した精算もしておいた。……あ。

花、即座にミナミを起こす。

二宮 ありがとう。行こうか。

ウエマツ うん。じゃ、お世話になりました。

二宮、ウエマツ、ミナミと花に礼をして二宮の後を追う。

ミナミと花、しばらく黙ったまま動かずにいる。

ミナミ あのこと……。

花 ひいつ。(身構える)

ミナミ どうも。

ミナミ、大変照れている様子。

花 ……もうちよつと先まで、やればよかった。

溶暗。

※ ルート6 スパート ※

(商店街のアーケードの近くにて)

五人が街の路上に出ている。

イシ この商店街のお祭りも今年で最後だね。

花 ここも、記念公園の一部になるんですか。

イシ 幹線道路が通って、マラソンのコースになるんだって。オリンピックのとき。

花 ……。

トイキ 私好きだったのにな。あそこのヤキトリ。

花 クシタロウ！

テイ ビールにはヤキトリ。

花 テイさん、お腹出て来た、お腹出て来た。

テイ そうだった、やばい。

トイキ 引越すんだって？

テイ 一軒家よ。山の手夫人。

トイキ 中国に帰るのかと思った。

テイ 相手の親に挨拶するだけ。

イシ 飛行機？

テイ 4ヶ月だから大丈夫。

イシ 心臓の音、もう聞こえる？  
テイ 聞いてみる？

4人、テイのお腹に耳をあて、心臓の音を聞く。

花 男の子ですか？ 女の子ですか？

テイ 女の子みたい、ついてないから。

トイキ 難しいわよ、女の子は。

4人、耳をお腹から離す。

ミナミ 今日で、みんな、チーム「リヴァプール」卒業ね。

イシ・テイ・トイキ ……。

ミナミ 晴れて、花さんが一流のヘルパーとなったのも見届けました。

イシ 一流のヘルパーって、どういうの？

トイキ 私達は何流？

テイ 三流じゃない？

イシ・トイキ ……。

テイ 三人いるから。

イシ・トイキ ……。

花 えっと、上手く言えないんですけど…、皆さんのチームに入れてもらって、最初は戸惑いもありましたが…、毎日、新鮮でした。

トイキ 背番号3番、トイキ。ありがとうございます！ 皆さんのおかげで、アパート借りて娘と暮らすことになりました。今までため息ばかりで甘えたり、朝起こしてもらったり、ハルの面倒見てもらったりして、本当に、本当に、ありがとうございます！

イシ 背番号1番、イシ！ いつも小姑みたいにうるさいこと言っすみませんでした！ ミナミさん、私、あなたの本当の小姑になりました。心残りは、洗濯機を買い換えられなかったこと、ミナミさんの歯磨きが下手なままで終わったこと。東京マラソンを走りきって、大阪に向かいます。心拍数、一気に上がってます。

イシ、だつと走り出す。トイキも負けじと走り出す。

テイ おっと、イシ選手、トイキ選手、走っている、走っている、オリンピッククロードを走っている！ 背番号2番、テイ。テレビ独占してすみませんでした。夜、うるさくしてすみませんでした。中国人のマラソンのレベルは刻々と上がっている。見よ、こ

の実力を！

テイ、走り出そうとするが花に止められる。

花 テイさん、テイさんは沿道にいてください。

テイ あ、そうか。

花 背番号4番、花。……。

花、ミナミと目が合って、うつむく。

花 もう迷いません。トラックではなく、街で走るのが本当の私です。ペース配分は完璧。

チラシ入れのおかげで、給水上手く取る自信もつきました。後は、もう、迷いません！

花、走り出す。

イシ おっと手強い、オリンピック候補の参戦だ。

ミナミ 5キロ地点、給水ポイント。

イシ 取った！

トイキ (抜かれながら)惣菜工場で鍛えた腕の振り！

テイ みんな頑張って、ファイト！

ミナミ 花さん、リズム、リズム。

花 (はつとして)カレー、ステーキ、ワンタンメン、カレー、ステーキ、ワンタンメン。

イシ 花選手、いきなりフォームをもも上げに変え始めた。

花 商店街のアーケードをくぐり、都電の線路をまたいで、保育園……。

ミナミ もうすぐ急激な上り坂にさしかかる。

イシ マラソンの選手はじたばたしているところ全部が人に見られてしまう。

トイキ もう逃げも隠れもないわ。

テイ 教会見えてきたよ、シスター！ (手を振る)

花 歩道橋を通って惣菜工場……。

イシ アサリさん、賃金アップもぎ取ろう！

花 街はずれの駐車場……。

テイ あそこで煙草吸ってるのウメサトじゃない？

イシ あいつ、ぶつぶつ言いながら一緒にバタさん探してくれたんだ。

テイ あばよ。

トイキ 卒業式には行こうって言ってみよう。もうすぐハルだもの。(スピードを上げる)

イシ トイキさん、意外に走れる……。

テイ 母親の意地か？

ミナミ 下り坂はブレーキ踏むの。加速しちゃ駄目よ。

花 いやいよ飛び立ったら気圧、スピード、機体の向きを敏感に捉え風に乗ってバランスを取っていく。

ミナミ 集中力、判断力、後は忍耐力。

トイキ 風、強いよ、飛ばされちゃう……。

ミナミ 風の強い日は風を味方にする。

テイ トイキさん、そういう時は前の人の後ろに隠れりゃいいのよ。

トイキ ……あ、そうか。

ミナミ 暑さも、坂道も、自分の味方にするの。

花 私、走ってるんだ、この街と、この仲間と。

トイキ あの子が見てるんだから、私の背中を。

イシ 二段ベッドに合わせた細長い窓の繋がるベッドハウスたち。立ち飲み屋。焦げ臭い  
たき火。コインランドリーの匂い。お兄ちゃんのおい。

テイ いやあ、スガガシイなあ。

トイキ 仕事を求めて朝の5時から福祉センター前に並ぶ人々……。

イシ 身体をぼろぼろにしながら路上で刻々と歳を重ねている人々……。

テイ 私達はその間をすり抜けて走る。

トイキ この風景そのものが、まっさらなアスファルトに塗られていく。

イシ 街の苦しみそのものが塗り込められる。

テイ 私達は忘れない。

ミナミ 間もなく折り返し地点にさしかかる。

バタが顔を出す。

バタ おい。もう半分だつて。頑張れよ。

イシ (驚いて振り返る) 何？ バタさん？ 駄目よ、私、まだそつちには逝けないわ！

テイ おっと、イシ選手、スパートをかけ始めた。大きくリード、集団から抜け出た！

花 心臓がドキドキしてきた。

ミナミ 心臓がドキドキしてきた。

イシ 目の前真っ暗で失神寸前。

トイキ 足がもつれてくる。

テイ もうすぐ30キロよ！

花 自分の身体が自分のものじゃないような感覚。周りが見えなくなっていく……。

花、転倒する。

花 初マラソンの記憶が甦る。……次々に後ろの選手に抜かされていく。時計も壊れ、自分がどこにいるのかさえわからなかった。自分の息を切らす音だけが聞こえていた。

花の心臓の音だけが響いている。

花、立ち上がる。

ミナミがすつと近寄っていく。

ミナミ あなたがコーチだったら、私は誰よりも早くマラソンを走り切れそうな気がします……。

花 だって、あなたのいる世界と、私のいる世界は少し違うと思うんです。私があなたの力になれるとは思えません。

ミナミ そんなことはないですよ。

花 ……？

ミナミ あなたは軽々と飛び越えてったじゃないですか、その壁を。

花 ……。

ミナミ 楽しみにしています、二度目のマラソン。

後ろから呪文のような声が聞こえてくる。

イシ・テイ・トイキ カレー、ステーキ、ワンタンメン、カレー、ステーキ、ワンタンメン……。

イシ、トイキ、テイが再び走り始めている。

### ※ ルート7 スタート ※

(マラソンコースにて)

イシが記念パーク建設反対の抗議の旗を背負って走っている。

前方に不意に部長が現れる。

イシ 部長！ 随分前に見失ったと思ったけど、そんなに差なかったんですね。

部長 いや、途中でどうも胃腸の調子がおかしくなってきた、トイレで時間食って……。

イシ ……今、何番くらいだろ、全然わかんない。

部長 イシ、俺等は早く走るより、長く走った方がいいんだ。その分、大勢の人にアピールできるだろ。何なら最下位狙うか。

イシ ……部長、私、大阪に行っても、走ります。

部長 ああ、釜ヶ崎の仲間に、よろしくな。

イシ ……一から十まで、お世話になりました。

部長 憲法第25条生存権が基本だ。

イシ はい。

部長 最後まで走れるか。

イシ ……たぶん。

部長 ……どうしていいかわからなくなったら、先に進むのが苦しくなったら、俺はいつも考える。お前の兄貴ならどうしただろうって。

イシ ……。

部長 バタさんは、タドロコ先生は、ダンスケはどうしただろうって。

イシ ……部長。

部長 俺等の渡された旗、こなきじじいみたいに重てえな。

イシ はい。

部長、イシ、走り去っていく。

(ベッドハウスのロビー)

ミナミが一人でテレビを見ている。

エマが入ってくる。

エマ 静かになったわね、ここ。

ミナミ (頷く)

エマ (テレビを見て) 相変わらずマラソン好きね。 ……まだ定期購読してるんでしょ、陸上競技マガジン。

ミナミ 想像するの。走ってる自分を。

エマ ……。

ミナミ 花さん、八位だった。

エマ ゴールインした後も、まだ走ってた。

ミナミ フフ。

エマ 興奮したんでしょうね、ちゃんと走れたことに。

ミナミ うん。

エマ ……オリンピックに出てほしいと思わない？ 見たいでしょう、あの子が風切って

この街を走るの。

ミナミ ……この街の半分がなくなるのよ。

エマ 記念パークできたら賑やかになるわよ。

ミナミ ……。

エマ 明るくて豊かな街の方がいいでしょう。あなたが言うように、ここが福祉の街として再生するためにも。

ミナミ ……。

エマ ……なんで先に死んでしまうのかしらね、男の人って。

ミナミ 生物学的に弱いのは、男性の方が。

エマ お父さん。結婚の申込みの時、なんて言ったか知ってる。

ミナミ えー……？

エマ 「自分の大切なものを自分の手で守りたい」

ミナミ ……。

エマ 「そのためには、城がいる。自分たちの城……」(家の中を見回す)

ミナミ ……。

エマ そっくりよ、あんたたち。

ミナミ ……。

エマ 死んだ人のことは、追いかけてすぎない方がいい。

ミナミ ……だいじょうぶ。新しい恋、するから。

エマ ……いるのかしら、この先、こんなところ来てくれる人。

ミナミ ええ。

エマ じゃあ梅里さんに謝っておかなきゃね。土地権は渡せませんって。

ミナミ ……。

エマ まったく、誰に似たんだけ……。

ミナミ ……ありがとう。

エマ いいわよ、もう。あんたのワガママに振り回されるのはいつものことなんだから。

ミナミ ……きかん気と居直り。

エマ ……え？

ミナミ 私のテーマ、教えてくれたの、お母さんなのよ。

エマ はああ？

ミナミ これからもよろしくお願いします。

エマ いいわよ、そんな、あらたまらなくて。

ミナミ 絶対に、お母さんより長生きしますから。

エマ ……それは守って頂かないと。約束だから。

ミナミ (頷く)

エマ ありがとう。

エマ、ロビーから出て行く。

ミナミ、泣き顔になるのをこらえている様子。

ミナミ 私も走る……。

懸命に、身を乗りだし、身をよじらせる。

とうとう、車椅子から崩れ落ちる。

尻餅をついた体勢で、ぼんやりしている。

ロビーに花が走って入ってくる。

花 大丈夫ですか。

花、ミナミに手を差し伸べる。

ミナミがその手を掴んだ時、花、床に倒れ込む。

ミナミ ……大丈夫ですか。

花、床に倒れて、息を切らしている。

花 ミナミさん……。

ミナミ いいよ、落ち着いてからで。

花 ……何で、車椅子から、落ちたんですか。

ミナミ 落ちたんじゃない、降りたの。

花 ……別に意地張るところじゃありませんよ。

ミナミ ティッシュ取ろうと思ったの。

花 嘘。

ミナミ 地べたに座りたかったの。

花 地べたに？

ミナミ ええ。私、いつも車椅子だけど、本当は地べたにずっと座っていたいの。

花 ……。

ミナミ ……びりっけつでなくて良かったわね。

花 やっとマラソンを走れたと思います。

ミナミ おめでどう。

花 今日、走ってて思ったんですよ、空を飛ぶ鳥に比べたら、飛べない私達はみんな「シ  
ョウガイ者」だなぁって。

ミナミ そんなこと、わかってたわよ。

花 ……ですよね。

ミナミ でも、こんなに感謝して、人の言葉を聞くのは初めて。  
花 ……。

ミナミ そんな、「今、生まれたて」みたいな顔、しないでよ。

ミナミ、花の手に触れたまま、微笑む。

溶暗。

(了)